響　風

Hibiki　Winds

画集「北九州１０１景」西川　幸夫より

あしや句会

第 ３ 号

はじめに

平成の世も今年で二十年目を迎える。小渕さんの「平成」と書かれた紙を掲げたテレビ画面が懐かしく、また子育てに忙しくしながらも楽しかった社宅時代を思い出す。その頃すでに千種さんによって俳句の種が蒔かれていたのだから、この二十年間は自分育ての時期だったようにも思う。俳句脳より若干我が身の脂肪を育てたことは否めないが、俳句によって得たものは多い。

今年の一月中旬高校時代の同級生三人と久しぶりに会った。同窓会が別府で開催され、参加した関西在住の友人たちが小倉で新幹線に乗り換える前に、欠席した私と小倉で会うために時間をとってくれたのだ。年賀状の行き来はしているが、ゆっくり話すのは久しぶり。塾講師、介護保険認定の仕事、カウンセラーなど仕事を持つ彼女たちの話や、それぞれの家族や親の介護のことなど話があちこちに飛びながら高校時代に戻ったように何時間も話した。その中で専業主婦の私に今一番興味のあることは何かと聞いてきた。すぐさまに「よいご縁があって俳句」と答えた。

句の出来はさておき、俳句を続けてきたという実績がそう言わせたのだろう。鋭い感性があるわけでもなく、溢れ出る思いがあるわけでもないが、ただメンバーとの吟行句会が楽しく、自分なりに感じたままを五・七・五に詠む。「よいご縁があって俳句」は私にとって大きな財産になっている。

振り返れば、平成十九年の吟行句会は、「十日恵比須詣り」「節分祭」に始まり、若松北海岸・海の中道・唐津などの自然豊かな風景を眺め、夏行は東京の佃島や菊坂など下町を歩き、忘年句会では海峡を見下ろしながらの河豚料理に舌鼓を打つことができた。

「あしや句会」の各人からもいろいろ喜ばしい報告があり、また東京暮らしの長かった佳与子さんが北九州に戻り八月から一緒に吟行するようになり、一段とエネルギーの増した一年となった。

今年も「よいご縁」で一年を楽しく吟行し、俳句に精進したいと思っている。

平成二十年二月

江本　由紀子

響風　第三号　目次

■はじめに

■吟行記

第三十回　十日恵比須神社・・・・・・・・・・・ 1
第三十一回　櫛田神社の節分大祭・・・・・・・ 4
第三十二回　若戸渡船場・夜宮公園・・・・・・ 8
第三十三回　久保邸・吉祥寺・曲里の松並木・・・ 11
第三十四回　旧伊藤伝右衛門邸・嘉穂劇場・・・ 13
第三十五回　大内花庭園・・・・・・・・・・・ 17
第三十六回　虹の松原・鏡山・・・・・・・・・ 20
第三十七回　若松北海岸・千畳敷・・・・・・・ 24
第三十八回　マリンワールド海の中道・・・・・ 28
第三十九回　北九州美術館・高見神社・・・・・ 31
第四十回　住吉神社・楽水園・・・・・・・・・ 36
第四十一回　関門海峡・長府・・・・・・・・・ 40

■自選句

十四～十五　平成十八年十二月～十九年三月・・・ 46
十六～十七　平成十九年四月～七月・・・・・・・ 48
十八～十九　平成十九年八月～十一月・・・・・・ 50

■「青春」　原作　サムエル・ウルマン・・・・・ 52

■あとがき

吟行記

（第三十回～第四十一回）

第三十回吟行記

平成十九年　一月十日（水）

参加者　節子　聖子　光子　真理子　由紀子

十日恵比寿神社（福岡市　東区）

昨年末の忘年句会で、四季折々の祭礼に参加するのもいいのではという話がでて、早速初句会は「十日えびす祭」に決まる。毎年テレビや新聞に取り上げられる博多の「十日恵比須神社」の恵比須祭を一度は見たいと思っていた。新年早々の神事は無病息災や開運を願う行事が多いいが、特に年初めに「えびす様」に参詣すれば、ニコニコ顔のえびす様のようにこの一年笑顔で暮らせそうな気がする。

一月十日ＪＲ吉塚駅に十時集合。光子・由紀子の北九州組が改札からでると皆待っている。駅からまっすぐ海側へ歩くとすぐに「東公園」が見えてくる。以前の東公園は「日蓮聖人」と「亀山上皇」の像が目立つ広い自然公園だったが、昭和五十六年ここに県庁が移転してきてから様変わりしてしまった。公園の入口からはみだすように露店が軒を連ね、中に入るとさらに公園内の路という路に露店がでている。神社はこの公園の一番奥まった所にあるので、まず入口近くの「日蓮聖人」の像の方へと回る。社務所前には鳩が群れている。曇空から時折冬日の差す公園内には北風が吹き、鳩は体を膨らませ、聖人像を取り囲む白い旗はぎしぎしと音をたてている。

寒風にきしむ旗竿日蓮像　　節子

元寇の浜駆け上がる北風強し　　真理子

冬の鳩頭を肩に埋めけり　　聖子

見上げるほど大きな日蓮像は元寇が押し寄せた玄界灘へ立ち向かうように立っている。その台座には「元寇の役の戦い」が何枚かの銅板のレリーフで描かれている。一枚一枚のレリーフの中の日蓮はピカピカに輝いている。詣でる人が触るのであろう。そこだけが目立つので来る人が次から次にまた触っていく。もちろん私達も頭を撫でながら一回りしたが、靴を揃え素足でお百度を踏む青白い顔の女性もいたので、邪魔をしないように早々に階段を下りる。

再び露店の並ぶ路にでて、福笹を手に持ち帰っている人を見ながら奥へと進む。あちらからこちらからと人が増えてくる。一月八日の初えびす、九日の宵えびす、十日の正大祭、十一日の残りえびすと「十日えびす祭」が四日間もあるとは知らなかった。前日九日の宵えびすには「徒歩詣り」（かちまいり）といって博多芸妓の行列参拝があったらしい。毎年この場面が放

送されるのだが、実際にまだ博多芸妓はいるのだろうか。

福笹を手に来る人を道しるべ　　光子

本祭十日恵比寿の人出かな　　由紀子

どこからの人人十日恵比須かな　　節子

全国津々浦々に「えびす様」は祀られているが、ここの神社は名前からして「十日恵比須神社」という。普段は寂しいほど人の通らない所らしいが、このお祭りの時は人が波のように集まってくる。商都博多の商売繁盛、海運、豊漁豊作の守り神として親しまれ、御祭神は「えびす様」と「だいこく様」。どちらも縁起のよい神様で「何卒よろしく」と自然に手が合わさる。本殿近くになると人の列ができていて段々長くなっていく。福引を引いてからお参りということで、酒樽の積み上げられた奥にある社務所の「初穂料」と書かれた引換所に行き、えびす様の絵の券をいただく。それを持って福引の列に並ぶ。次から次に「当たりー」「大当たりー」とよく通る声が境内に響く。福笹と一緒に渡される景品は、

福起こし、米俵、干支、そろばん、福満等、縁起のよいものばかり揃えられている。五人とも違う景品で、わくわくしながら見せ合う。「大当たりー」は福起しといわれる恵比寿だるまと福満といわれる大きな赤い団扇。当てた真理子さんの団扇は確かに福を呼びそうだ。

初恵比寿笹持つ人の波となり　　聖子

酒樽の高く積まれて初戎　　光子

福引の列はこちらとプラカード　　節子

福宜連呼する「大当たり」初恵比須　　真理子

福笹を受ける誰かれ恵比須顔　　由紀子

長くなった参詣の列に並ぶ。ようやくお参りを終えて列から離れると、社殿の右側の畳敷きの部屋に白丁（はくちょう）をつけた人達が座り、長机には直会膳（なおらいぜん）の用意がされている。入口に説明書きがあり、それによると開運御座（かいうんおざ）という新春の縁起を祝う儀式で、一般の人も申込むことが出来るという。お祓いを受けた後、御加護を仰ぐ祈願が執り行なわれ、直会膳をいただく神事で、ここでも名物の福引がなごやかに行われている。えびす手一本の

打入れで御座が終了する。福笹を手にして皆えびす顔で出てくる。次に来るときはこれに申込みしようと思う。

初戎提灯古し然らぬも　　光子

算盤を当てし戎の福男　　真理子

公園を埋める露店や初恵比須　　由紀子

福引の大当たりの声境内に　　節子

昼食は近くのホテル「レガロ」のレストラン。ちょうど良いことにテーブルの横に仕切り台があり、引き当てた縁起物を並べてみる。暖房のせいか少し笹が縮んだようだ。レストランでも、ここを出てまた公園に向かう道にも福笹を持った人と次々にすれ違う。公園一帯がお祭りだ。句会場は公園を通り抜けた所にある県庁内の喫茶室を予定。その前にしばらくロビーで句作。真正面に「亀山上皇」の像がこちら向きに立っている。上皇もまた元寇の襲来に「敵国降伏」を伊勢神宮などに祈願されたとして、像は明治時代建立されたものだ。

県庁の最上階十一階は南側が展望室になっていて、県の物産品や工芸品を展示もしている。展示品を少し見ながら広い窓から見下ろすと今歩いてきた露店の並ぶ東公園がひろがっている。まだまだ賑わっている。北側の喫茶室にいくと、窓から福岡タワーや博多湾が遠くにみえる。幸運にも窓に近い一番奥の席が空いていて、句会にもってこいの場所だ。

県庁の展望室に初恵比須　　節子

県庁にて解散したが、節子・光子・由紀子は吉塚駅まで歩いて行く。仕事帰りらしい背広姿のサラリーマンたちも福笹を持って駅に向かっている。それぞれに福が待っているような気がする。よき初句会でした。

【福引の縁起物と福女の面々】

第三十一回吟行記

平成十九年　二月三日（土）

参加者　聖子　節子　光子　真理子　由紀子

櫛田神社の節分大祭（福岡市博多区）

一月の祭礼・十日恵比須祭に続いて、二月も祭礼・節分祭に参加してみようということになった。行くとなれば博多の櫛田神社がいいのではと即決。祇園山笠で全国的に名前を馳せている櫛田神社の節分祭は、大きなお多福面が神社の鳥居奥に据えられ、著名人や恒例となっている二月博多座歌舞伎公演の役者達が豆を撒く。毎年のように新聞やテレビのニュースに取り上げられている。

「あしや句会」のメンバーは、「行きたい。見たい。」と好奇心旺盛なのが取得であり、俳句には大切なことだと感じている。「見たーい」と元気よく手を上げるメンバーの顔が浮かぶ。節分祭当日は、土曜日ということもあって九時からの神事、十時からの豆まきに各々の都合に合わせて参加ということにする。

二月三日、神社の節分祭参加は初めての光子・由紀子は、折尾駅発七時四十八分の特急で博多へ向かう。突然の積雪で大渋滞した昨日の朝のことを話しながら、一日違いで予定通りの電車に乗れた幸運を喜びあう。八時半博多駅で合流した節子さんと三人でタクシーに乗り櫛田神社まで行く。もう雪は残っていないが、曇り空に時々青空がのぞく空模様に吹く風は冷たい。今冬の暖かさに慣れた身には少々厳しい寒さである。

テレビで見る大きなお多福が目の前にある。入口になっている口から境内に入ると、参拝者はまだ少なく、巫女たちが祈願受付や福引引換え所になっているテントの中で景品や椅子をならべたり、境内のお御籤を結ぶ細い綱から昨日までのお御籤を外したりしている。拝殿の中では禰宜たちが、もうすぐ始まる神事の準備らしく何やら立ち動いている。吐く息は白く、手は悴かむほどの寒さだが、うすい白袴の氏子たちが社務所より出てきて並び始め、簡単な説明会の後一列になって手を清める。用意された拝殿の椅子に座り、神事が始まる。祝詞やお祓いなど滞りなく進行される中、だんだん境内に参拝の人が多くなる。

お多福の口より入る節分会

由紀子

九人の神官揃う節分祭

節子

祀られている三神、青鬼、赤鬼のお面、天井の博多にまつわる目出度い絵（お多福、いちょう、力士、みこし、ご神紋など）や大根、白菜、葱などの供物など、早く神社に着いたおかげでゆっくりみることができる。拝殿の手前に立て札がある。それには以前訪れた時には気付かなかった拝殿の破風にある木彫りの風神雷神の説明が書かれている。見上げると説明書

きの通り、風神が「あっかんべー」をしている。雷神が一緒に暴れようと誘っているのに、氏子から嵐をおこさないように頼まれた風神は「いやだよー」といっているらしい。博多らしいユーモアあるものとして櫛田神社内の見るべきものの一つになっている。

十時の豆撒きの時間が近づいている。豆撒き会場は拝殿横の広場で、祇園山笠の時には清道旗が建ち、追い山の会場となる場所だ。会場は紅白の幕が張られ、大きな枡や豆撒き人形が飾られている。お面に着ぐるみの赤鬼、青鬼も出てきて会場を歩きまわる。鬼と握手をしたり、記念写真を撮ったりしている。節分祭の穏やかな光景だ。

青鬼の耳たぶ赤き鬼やらい　　真理子

鬼役の細き手足や鬼やらい　　由紀子

赤鬼と記念写真の節分会　　聖子

境内に豆撒きのアナウンスがあり、急に人が集まりだす。真理子さんも到着。一番前には小学生の男の子たちがグローブを持って始まるのを待っている。だんだん人で身動きがとれないほどになり、司会役のアナウンサーがマイクを持つ。放送関係者もぐるりと会場を取り巻いている。後ろの人は大きめの紙袋を取り出し、ビニール袋を差し出す人もいる。豆撒きに慣れた人たちだと関心し、自分も何かバックの中に入っていないか探してみる。小さなビニール袋が入っていたので少々不満ながらも手に持つ。

拝殿で御祈願を済ませた袴姿の善男善女たちが舞台に立ち並び、手には赤いボールと豆の入った枡を持っている。神官の厄払いが終わるといよいよ豆撒き。善男善女たちが、まずホークスの選手たちのサイン入りの赤いボールを高々と投げる。それを拾う時点で手に持った小さなビニール袋はどこかに飛んで行ってしまう。大きく差し出された会場中の人の手に、ビニール袋にボールや豆袋が入るのを待つより、自分の手で掴んだり、拾ったりする方が確実だと実感。男の子達がもっているグローブは正解。

次々に豆袋や菓子袋が投げられる。前の人の肩に乗った豆袋をさっと取る。足元に落ちた豆袋を拾おうとすると横の人から取られる。腰をかがめると二つ取れたが、上から人が乗ってくるようで怖い。皆必死なので、カルタ取りのような速さが要求される。福を拾うためには体力も必要である。それぞれに三～五個くらいは拾ったと思う。

次々に撒き手登場節分祭　　節子

サイン入りボール高々撒く追儺　　真理子

豆まきも「祝いめでた」でメとなり　　聖子

一回目の豆撒きの後、お祝い事にはつきものの「祝いめでた」の歌で〆る。博多の豆撒きらしい。この豆撒きは午後四時まで三十分ごとに行われる予定だ。第一回目は地元財界人の善男善女が登場したが、お目当ての歌舞伎役者たちは午後の部らしい。その時はもっと凄まじほどの人出になるかもしれない。豆撒きの後ろで見ていた聖子さんと合流。足の調子がよくないので怪我をしたら大変だ。

会場から出て境内の祈願所に行き祈願券を購入。家族や自分の名前を祈願証に筆で書いてもらう。福引券もついているので福引きをして、拝殿に祈願証を持ってお参りをする。もうこの時間になると境内は人で埋まってしまう。拝殿横から回るとまた豆撒き会場にでる。また始まりそうだったので、もう一度チャレンジすることにする。光子さんと節子さんは少し前の方へ。真理子さん、由紀子は後ろの方。聖子さんは端で見学。いよいよ始まると後ろにはあまり飛んでこない。由紀子は少し前に出て取ろうとするが、中途半端な位置なのか投げている豆袋は届かず、小さな餅の入った袋はもっと後ろに飛んでいく。一個も拾えなかった。横にいた六十代の女性のグループも拾えなかったらしく「もっと若い人に投げさせんと、ここまでは届かん！」と文句たらたらだったが、福を拾うには努力がいる。さすがに福岡市在住の真理子さんは後ろにいて小餅を拾っている。豆は前の方、重い餅は後ろに飛ぶと心得ている。怖いと思うほど迫力ある豆撒きなので二回で十分だ。皆の靴は踏まれたのか泥で汚れている。多分反対に踏んでもいるだろう。

かじかめる手や祈願札名を書き記す　　光子

豆撒きの小餅頭上に飛んできし　　真理子

境内に名物「銀杏焼」が売っているのを真理子さんが買ってくれる。香ばしい銀杏を頬ばりながら境内をでると、「恵方巻き」を売っている。櫛田神社前なので縁起良さそうだ。道路を渡って「博多町屋ふるさと館」に立ち寄る。ここは明治中期の博多町屋の建物を移築・復元したもので、中では博多の民俗文化にまつわるさまざまな展示や、博多織の実演などもおこなわれている。実際に機を織ってもよいというので光子さんが挑戦。難しそうなので途中少し躊躇したが、作務衣を着た年配の男性は半ば強制的に光子さんを座らせる。

機織は簡単ではないことがわかる。

「ふるさと館」前の道路を隔てた反対側に今日の食事処「むらた」がある。信州そばの美味しい店で、二階の畳の間で句作をしながら五句出句。真理子さんは午後予定が入っているので投句のみ。四人で句会。

豆まきの声の蕎麦屋の二階まで　　光子

豆まきの声が聞こえてくる。「ふるさと館」も「むらた」も正面に神社の鳥居のある櫛田表参道に面しているので、窓から神社の様子が見える。テーブルに置かれている節分豆や蕎麦を食べながら豆まきの声を聞く。

節分祭を満喫。店を出て再び「ふるさと館」の畳の間に上がり、お互い句評などして櫛田神社を後にする。まだまだ豆撒きの声が続いている。

【櫛田神社・節分大祭の本殿】

第三十二回吟行記

平成十九年　三月十五日（木）

参加者　聖子　節子　光子　真理子　由紀子

若戸渡船場・夜宮公園（北九州市若松・戸畑区）

今月は久々に北九州を吟行することになり、どこにしようかと考えた。今年の冬は全国的に暖かく雪不足がニュースになっている程なので、暖かければ山裾を歩くのもよいかもしれないと「河内貯水池」やその奥にある「九州民芸村」を下見に行く。だが民芸村の寂れようは目を疑うほどで、ガラス工房も染色工房にも人がいない。実際に作業しているのを見せるのが目玉だったのに、家具や民芸品を売るばかりで「売地」の看板も出されている。せめて天気がよければいいが、天気予報は寒い雨になりそうだというので、急遽場所を変更する。

三月十五日　十時三十分、戸畑駅集合。予報通りの雨。五人集まれば明るくなるメンバーなので、ワイワイいいながら傘をさしながら裏駅より若戸大橋へと向かう。今日は大橋の下の「市営若戸渡船」の乗り場から対岸の若松に渡り、以前吟行した「旧古河鉱業ビル」あたりを散策し、また渡船に乗って戸畑に戻り「夜宮公園」へと行くことにする。

明治初期から運行が始まったという渡船は、一九六二年若戸大橋の開通で廃止される予定だったが、市民の強い要望で存続。現在でも通勤、通学等、洞海湾を挟んで戸畑地区と若松地区を結ぶ重要な交通手段となっている。一時間に三～五便も出港しているので待ち時間もさほどなく乗船する。ちょっと買い物に出かける感覚である。

船の中は窓際に備え付けの木製の椅子があり、天井からは電車のようにつり革が下がっている。自転車や荷物も乗せられるように真ん中を広く空けてある。五分とかからない乗船時間だが、橋を渡って見る洞海湾と違って旅をしている気分になる。

駅裏は海にまっすぐ花辛夷　由紀子

駅裏がすぐ渡船場春の街　節子

春浅し渡船乗り場の硬き椅子　由紀子

船降りてくる自転車も春雨に　真理子

百円の渡船木の芽の吹く風に　光子

あた、かきイソギンチャクの伸び縮み　光子

若松側に渡って乗船場近くを散策予定だったが、雨は止みそうになく寒い。「旧古河鉱業ビル」の入口に「コーヒーあり」の看板を見つけ中に入

る。一階のフロアではダンス教室のレッスンなのか、一組の男女がワルツを踊っている。二階の窓からは湾を往来する船や戸畑地区の牧山の信号所・日本水産のビルなどが見える。少し温まったところでまた渡船に乗り込み戸畑に戻る。大橋の橋桁を間近に抜けて着岸。

椅子寄せてダンス教室春灯　真理子

春霖に流れてきたるダンス曲　光子

まだ踊るワルツの二人春灯　由紀子

あたたかしつり革下がる渡し船　節子

春雨の空の大橋見上げられ　節子

車で昼食会場「明専会館」へと移動。戸畑駅周辺は再開発が進み様変わりはしたが、以前戸畑に住んでいた節子さんに道案内してもらう。市民会館跡や明治学園を通り過ぎ夜宮公園横にある会館の駐車場へ。ここは九州工業大学（九工大）の後援組織「明専会」が運営している会館で、結婚式やパーティーも開かれる。こじんまりとしているが庭が美しく躑躅が刈り込まれ満開の花桃が揺れている。

ポタージュに浮かべられたる雛あられ　聖子

ＢＧＭ止んでしじまの春御膳　聖子

運ばれる桜のムース震えをり　節子

昼食後「夜宮公園」の菖蒲田に歩いて行き、その先にある「西日本工業倶楽部」の門まで行ってみる。春と秋の一般公開時に建物の中に入れるが、普段は門から庭園や洋館を見るのみである。アール・ヌーボー様式の館は一際目立つ。私財を投じて明治専門学校（現九工大）を設立した安川敬一郎と次男の松本健次郎氏（伯父松本潜の養子になる）の父子が明治期建築界の指導者でもある辰野金吾氏に学校や自宅の設計を依頼。第二次世界大戦までは松本家が住宅として使っていたが、戦後進駐米軍に接収され、その後北九州経済人の集まりである西日本工業倶楽部が設立されると同時に松本氏から屋敷を譲りうけて倶楽部会館として利用されている。

夜宮公園のほんの一部を散策しただけだが体が冷える。公園横の小さな珈琲店に入り句会をする。テーブルが二つ、マスターのい

るカウンター席が少し、窓際にカンウター席が少し。十人も入れば満席になるような珈琲店は焙煎にこだわり美味しい珈琲を出してくれる。温子さんや節子さんには懐かしいお店だと思う。雨に濡れた体に熱い珈琲が美味しい。窓辺にはフリージャーが飾られている。小声にて十句の句会・・・。

濡れているコーヒーショップ暖かく　　真理子

雨だれの暖かそうな窓ガラス　　節子

雨樋の辺り轉り盛んなり　　聖子

春時雨珈琲店に一人客　　由紀子

戸畑駅にて解散だが、途中「新日鉄沢見社宅」に寄る。九工大の正門近くにある社宅はまだ使われているのだろう。雨が強まり人の出入りはなかったが、駐車場には車が二～三台。温子さんや節子さんが社宅をでられてから何年経つのだろうか？　社宅におじゃましたり、九工大のキャンパスで松ぼっくりを拾ったり、懐かしい思い出の地である。

皆を戸畑駅で降ろし、先ほど渡船で渡った洞海湾を若戸大橋経由で自宅まで車を走らせる。

【西日本工業倶楽部】

【若戸大橋と若戸渡船】

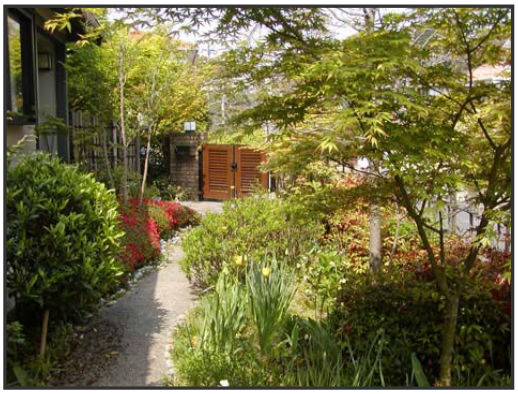
【明治学園】

第三十三回吟行記

平成十九年　四月十二日（木）

参加者　節子　聖子　光子　真理子　由紀子

久保邸・吉祥寺・曲里の松並木（北九州・八幡西区）



三月の投句を済ませホッとしていたある日、大きなニュースが飛び込んできた。光子さんのご主人の腎臓移植の話。俳句入選などで時々打ち上げ花火のように驚かせてくれるが、今回はとてつもなく大きな出来事だ。手術は無事成功し経過も良好なのが何よりで、四月の吟行句会は光子さんの慰労会も兼ねて計画する。薬剤師として働くドラッグストアの仕事と毎日の病院通いで忙しくしている光子さんは、吟行当日も休みを取れそうにないので、時間の無駄のない究極の吟行地として光子さんの庭におじゃますることに決める。去年の四月にも吟行させてもらったが、その時はご主人の案内でたくさんの種類の木や花の庭を見せていただいた。

四月十二日十時二十分折尾駅集合。駅から車で十五～二十分程で光子邸に到着。さっそく道路に面した北側の庭を拝見。楓の若葉がさらさらと揺れ、その下にサツキや牡丹、ビオラが咲き、奥には梅の古木が小さな実をつけている。ここだけでも幾種類もの花木があるが、バラのアーチを潜って南側の庭に足を踏み入れると、さらに多くの花木が植えられている。両側や前の家の様子が気にならないように樫や山茶花などの木々が垣根となっている。庭の真ん中には巡廻式の小川があり、それに沿って少し傾斜するように小山を造っている。そこには故郷の会津若松を懐かしんで九州ではあまり見かけないブナやハルニレの木が植えられている。白樺も植えられていたが去年の台風で折れたらしい。

ふるさとの山模す庭のぶな若葉　　真理子

故郷の会津の風やぶな若葉　　由紀子

いっせいに花房なびく風の来て　　節子

エイプリルフール三人がかりにて　　光子

小川の水は来客時のみ流すというが、せせらぎのマイナスイオンと爽やかさは、これからのご主人の回復に大いに役立つことになるだろう。楓・馬酔木・ヤマボウシなどの木々の緑が美しく、この庭に

いると時間を忘れてしまいそうだ。美味しい冷茶をいただいた後、近くの藤の寺「吉祥寺」（きっしょうじ）に寄る。吉祥寺の藤は藤棚からわずかに房が下がるほどで、一メートルほどになる藤の盛りはちょうど「藤まつり」の開催される月末頃になりそうだ。微かに香りが漂い、虻も小さな房の回りを飛び交っている。

吉祥寺藤の花まだ房短か　　真理子

藤房のまだ下がらずに藤の寺　　由紀子

昼食は「北九州プリンスホテル」を引き継いだ「ホテルクラウンパレス北九州」の十階にある日本料理の「七福」にて。北側の窓席が空いている。ここからは黒崎の街やその向こうにひろがる工場群、さらに向こうの若松などが一望できる。旧北九州プリンスホテル時代には、ここでよくテニスの練習や試合などしたが、屋内外のコートは広々とした更地となり、改装するのか無くなるのかプールもスケートリンクも工事中だ。ホテルの建物と結婚式場のみが残された格好だが、広々とした敷地に沿って続いている「曲里（まがり）の松並木」が良く見える。

昼食後光子さんは仕事の時間が迫ってきたので中座。残った四人は十階のレストランから見た「曲里の松並木」を散策する。ここは江戸時代にできた豊前小倉と長崎を結ぶ長崎街道の一部分で松の並木が残っている。長崎街道の中でも黒崎・木屋瀬・飯塚・内野・山家・原田といったいわゆる筑前六宿（ちくぜんむしゅく）といった各宿は特に賑わったという。その中の黒崎は都市化が進みマンションなどが建ち並んでいるが、この松並木は後に四阿が建ち、記念碑が立つ等美しく整備されている。

緑立つ曲里の松に注連張りて　　真理子

皿倉山仰ぐ古道や松落葉　　真理子

松落葉ばかり選んで歩く道　　節子

海棠の君と呼ばれし友の在り　　聖子

今回は吟行のみで句会をおこなわなかったが、後で句作となるとなかなか出来ない。四人で句会をもてばよかったと少し悔やまれる。その後光子さんのご主人の回復は驚異的で、二ヶ月の入院予定が一ヶ月で済み、あの庭木を見ながら静養している。お互い無理せず、自分のペースで気持ちの良い日々を過ごされることを願っている。

第三十四回吟行記

平成十九年　五月十一日（金）

参加者　節子　光子　由紀子

旧伊藤伝右衛門邸・嘉穂劇場（福岡県・飯塚市）

毎月の吟行地を誰が決めてもいいのだが、毎日仕事で忙しくしている人を外すと自然と役割が決まってくる。役得というほどでもないが、吟行地は自分の行きたい所を優先する。テレビや新聞のニュースを見ていると、各地の行事や見頃の花などの映像や記事が載っている。今月の吟行日に行ってみようとか、来年はここに行こうとか、吟行地情報のアンテナを立てている。今回は今年の四月二十八日から一般公開されている「筑豊の石炭王・伊藤伝右衛門旧邸」。

ゴールデンウィークということもあって、旧邸の見学者で賑わっている様子がテレビに何度も映し出されている。建物は当時の贅を尽くしたものらしく是非見たいものだと今月の吟行地に決める。旧邸のある飯塚市は、光子・由紀子の住む北九州市と節子さんの住む大野城市と位置的に三角形になるので現地集合。

五月十一日折尾駅からＪＲ筑豊本線（福北ゆたか線）に乗り、節子さんは筑豊本線（原田線）に乗って新飯塚駅で合流予定。飯塚経由博多終点の「福北ゆたか線」に乗ることは今までなかったので、ちょっとした旅行気分で車窓の景色を楽しむ。遠賀川を渡って中間や鞍手の風景を眺めていた光子さんの一言。「何だか我が家に近い。」そういえば光子さんの家から飯塚に直接車で行けば三十分くらいかもしれない。車や電車を乗り継いで二時間弱かけて行くとはと笑い飛ばしながら新飯塚駅に着く。「原田線」に乗ってきた節子さんも山の中を抜ける景色はよかったらしい。

切り離す列車三両夏の草　　節子

山の名を駅の名にして踊子草　　節子

駅からバスセンターまで行く途中、商店街の店の前で水打ちしている人に道を尋ねると伝右衛門邸まで歩いて二十分くらいという。バスの待ち時間など考えるとこのまま歩く方がいい。商店街のシャッターは半分くらい閉まったままであるが、ゴミの少ない小奇麗な通りだ。

飯塚市役所や嘉穂東高校を通り過ぎると土手と橋が見える。遠賀川だ。いくつもの川が飯塚で合流し全長約六十キロの一級河川として響灘へと流れている。橋を渡った先に旧邸があるという。

小さな案内板の矢印に沿って行くと町角に案内人が立っていて教えてくれる。大きな長屋門の構えはさすがだ。四つの居住棟と三つの土蔵を持つ近代和風住宅と緑豊かな庭に見物人が次々に入っていく。屋敷内は撮影禁止ということで、案内人の説明に聞き入る。応接室はマントルピース、ダイヤ模様のステンドグラスなど格調高い英国風な造り、書斎の布壁は帯を解いた絹の繊維を塗り込めていたり、芭蕉布

の襖など、和洋折衷の建物の材料から調度品にいたるまで説明が付くほど当時の贅を尽くしたものだ。

建物の中央部分の廊下に人の列ができている。二階の白蓮の部屋を見る列だという。狭い階段を昇り、見学した後はまたこの階段を下りるために人数制限している。二十～三十分待っただろうか。待っただけあって、ここの女主人でもある白蓮の部屋は六畳と十畳の広さで、庭を眺めるのには一番良い所だ。茶室風な設えはこれまたどこをとってもさりげない贅沢が施されている。この屋敷は昭和三十八年伊藤家から離れ、現在飯塚市有形文化財として保存されている。旧邸の長屋門は白蓮のために造られた博多の別邸「あかがね御殿」の門で、昭和二年別邸が焼失し、残った門を移築したものと説明書きされている。

緑立つ石炭王の館とか　　由紀子

夏館案内の女声低く　　節子

伊藤伝右衛門は苦労の末に石炭事業で成功し、その巨万の富を現県立嘉穂東高校の設立や伊藤育英会などの教育文化事業に注ぎ、また嘉穂銀行や十七銀行（後の福岡銀行）の取締役として地元の産業・経済の発展に尽力し、衆議院議員になってからは遠賀川の改修工事を実現するなど地元の人々から慕われたという。他に麻生・貝島・安川など石炭王として大きな功績を地元に残した人物もいるが、伊藤伝右衛門の名をさらに世間に知らしめたのは歌人・柳原燁子（白蓮）との再婚と離婚だろう。苦楽を共にした妻ハルを亡くした後、再婚の話が持ち上がったのは華族の白蓮（大正天皇の従兄妹）二十七歳。炭鉱夫から一代で財をなした五十二歳の伝右衛門との不釣合いな結婚は、当時「金で買われた結婚」と噂され、「金襴緞子の帯締めながら、花嫁御寮は何故泣くのだろう」と世間は歌って同情したという。（この歌の実際のモデルではなさそうだが）

白蓮は最初の結婚に失敗し、伝右衛門との飯塚での再出発に賭けていたようだが、年令の差、育ちの違いなどの溝を埋めることができず、妻妾同居の家で満たされない生活を送る。この間短歌に打ち込み、中央歌壇に認められ「筑紫の女王」と呼ばれるほどになる。屋敷の掛け軸に書かれている白蓮の歌二句。

『あきの風　こよひのほそき　月かけも
　　愁とならで　君にふけかし』

『花とはな　うすむらさきとくれないと
　　うなつきあふは　何のこころぞ』

心の隙間を埋められない白蓮の前に現れたのが、七才年下の帝大生・宮崎龍介。白蓮はすべてを捨てて龍介の許に走る。大正デモクラシーを熱く語る青年に心惹かれ、夫には絶縁状を送りつける。それも新聞に公開する

という前代未聞のことをやってのける。姦通罪があった時代ならばこそであるが、新聞は事件の報道に明け暮れたという。

絶縁状の新聞公開には、デモクラシーの理論的指導者のある東大教授の率いる東大新人会の策謀があったというが、世間を騒がした「白蓮事件」に伝右衛門は冷静に事態の収拾をする。姦通罪で告発などせず離婚が成立。白蓮は貧しいながらも八十一才で亡くなるまで幸せな生活を送ったという。その絶縁状が邸内の「白蓮館」に展示されている。巻紙に書かれた内容は激しいものだが、美しい文字は白蓮の容姿と重なり、ひとつの作品のように見える。

白蓮の絶縁状や鉄線花　　光子

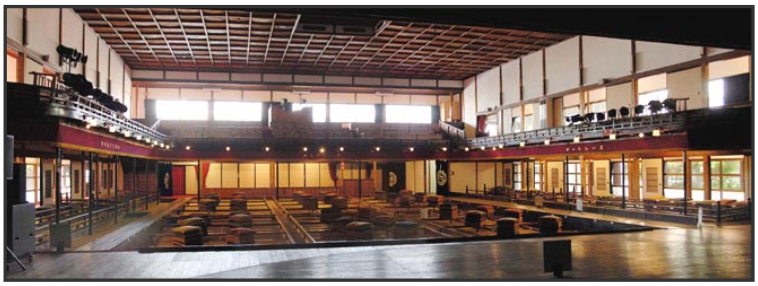
絶縁状美しき文字蓮の花　　節子

「絶縁状は美しい文字で書かねばならない。」というのが三人の感想。達筆であればこそ作品であり、同情も引くような気がする。絶縁状のコピーが二十円で売られている。ワープロで打たれた文字には味がないが、取り合えず購入。実際書かれた内容と新聞に公開された内容が載っていて若干違う。

バスに乗って飯塚駅方面へ行き、昼食を済ませる。次の吟行場所の「嘉穂劇場」まで歩いていく。田舎の飲み屋街のような通りの奥に「のぼり」と「立て看板」がある。これが「嘉穂劇場」だ。公演がない時は見学のみできるというので入場料を払って中に入る。客席や舞台の隅々まで見て回れるのが嬉しい。

天井は高く、柱のない客席の端々に座布団が積まれている。舞台に上がれば廻り舞台になっていて、舞台の下へ降りる階段がある。奈落への階段である。ここまで見せてもらえるとは思っていなかったので感激。奈落から上り階段までの通路には、ここで公演した春日八郎や美空ひばりなど多くのスターのポスターが貼っている。木材を多用し、灯りの付いた舞台下は木の匂いがする。

二〇〇三年七月の水害で壊滅的な被害を受け、なんとか劇場をまた復興させようと津川雅彦・中村玉緒・西田敏行などが支援に駆けつけたことは記憶に新しいが、この劇場の中に入ってみて守っていきたい気持ちが解る。二〇〇四年九月に再び劇場として蘇る。二階からの気持ちのよい眺めに、ここで句会をしようということになる。あまりの気持ちよさに昼寝をした人もいるが・・・。



新飯塚駅にて解散。

劇場の奈落より出て若葉風　由紀子

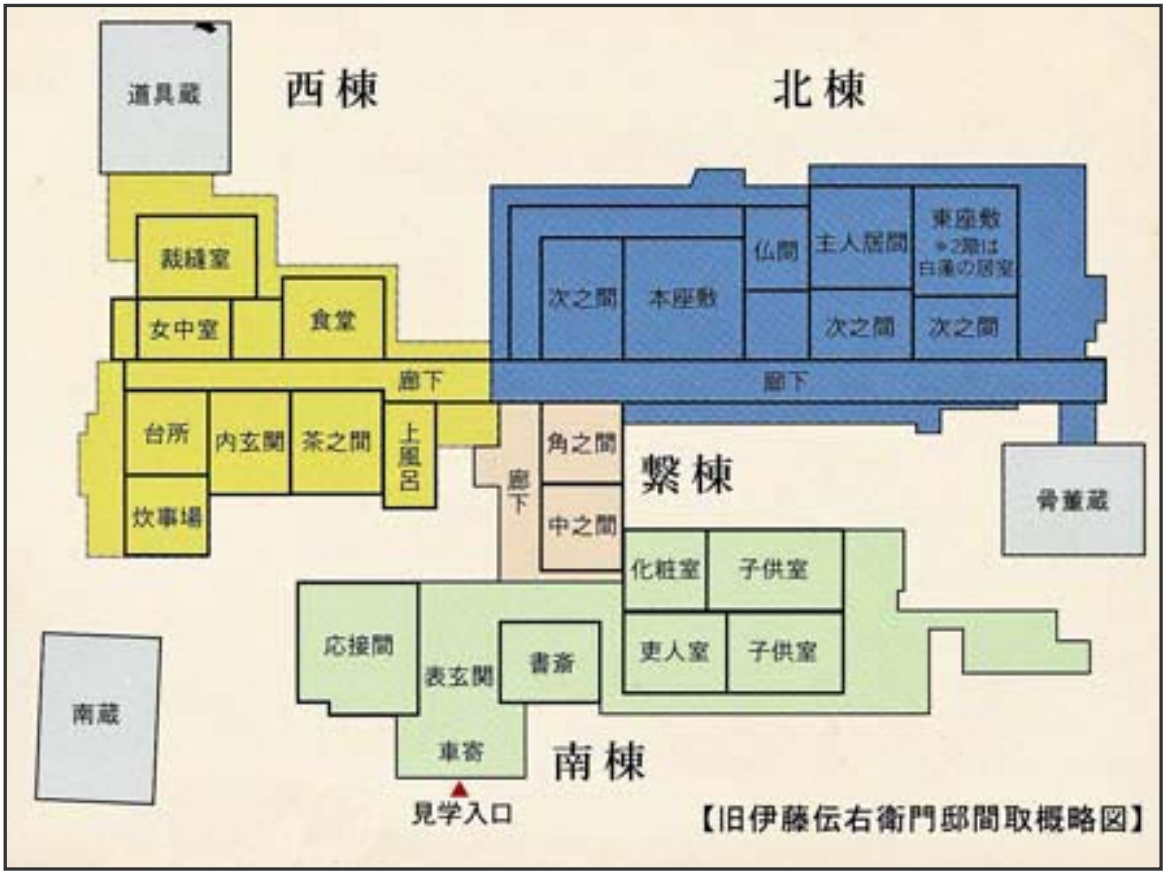
劇場の降りる奈落も夏に入る　節子

芝居小屋席のいろはに若葉風　光子

旅先の芝居小屋にて昼寝かな　光子

【小道具部屋】

【舞台下「奈落」】



【旧伊藤伝右衛門邸間取概略図】

第三十五回吟行記

平成十九年　六月十五日（金）

参加者　節子　聖子　光子　真理子　由紀子

大内花庭園（福岡県・直方市）

桜ほどではないが、季節が巡ってくると見たくなる花がある。梅雨の季節は花菖蒲と紫陽花。梅雨空に見る花菖蒲と紫陽花は活き活きとして美しい。名所といわれる場所も多く、毎年どこに行こうかと探している。去年の長崎県の大村公園の花菖蒲や宮地嶽神社・夜宮公園の花菖蒲、高塔山の紫陽花も見頃だろうと思いつつ、今回は近場でまだ皆が行ったことのない「大内花庭園」を提案する。ここは以前の「大内菖蒲園」で「貝寄風」が結成された年に吟行したことがある。あの頃は名前の通り花菖蒲が主だったが、今では四季折々に楽しめるように沢山の花木が植えられ、敷地も何倍も広くなっている。

六月十五日折尾駅十時二十分集合。小雨の中車で北九州から二〇〇号線を下り直方市に向かう。この辺りは飯塚に抜けるバイパスや大型ショッピングセンターができて少し様変わりしたが、大きな観覧車のある「びっくり市」は健在で、それを目印に車を走らせる。道沿いの観覧車の先にある信号から「びっくり市」を抜けて住宅街に入るが、どこで間違えたのか見覚えのない風景に来た道を引き返す。

Uターンして見覚えの菖蒲園　　由紀子

菖蒲園住宅街の高台に　　節子

住宅街の一角が急に開け、広場のような駐車場と大きな唐風の門が建っている。「花菖蒲まつり」「あじさい祭り」の看板にホッとする。先客がいるようで車が二～三台止まっている。入場料を払って中に入ると鉢に植えられた花菖蒲が両側に並べられている。一つ一つの鉢に違う名札がささされ、白や薄紫の大振りの花が五分くらい咲いている。ざっと見ながら砂利道を進み赤瓦の家の前に来る。「肯石庵」と書かれた扁額のある門をくぐると、個人の家と香春岳を見立てたという築山に幾鉢かの花菖蒲が並べられ、庭に向いて椅子と座布団が置かれている。この花庭園は個人所有の庭を有料で開放している庭園なので、実際人が住んでいると思うが、家の中に人の気配は感じられない。そっと覗くと家の横に犬がおとなしく座っている。

舞姫という名の菖蒲まだ蕾　　節子

おとなしき梅雨の留守居の子犬かな　　真理子

やや坂になっている道を上っていくと、畑のように一面に牡丹の木が植えられている。さらに坂を上ると楓の大木の奥に一軒の食事処のような家がある。広い玄関から中に入ると、二間続きの座敷に八鉢の花菖蒲が金屏風を背に並べられている。廊下にぎっしり敷かれた座布団に座り、お抹茶とお菓子を頂きながらゆっくりと鑑賞する。壁には俳句の短冊が飾られ、棚には庭園に咲いた牡丹や椿の花や紅葉の写真が分厚く積まれている。濡れ縁になっているテーブル席が空いたので席を移動する。籬（まがき）と竹から水が注がれる手水鉢（つくばい）、横に置かれた見頃の花菖蒲、木々に絡まった忍冬。この場所が特等席だ。

鉢のまま座敷に上げし花菖蒲　光子

屋根を越す木々より匂う忍冬　由紀子

つくばいも籬も湿り苔の花　節子

雨しずく落ちくる木立忍冬　光子

忍冬途切れ途切れに山の雨　真理子

横の小山から時折やさしい風が吹いてくる。竹林や庭の楓の青葉を揺らすほどではない風に、いつまでも座っていたいと思うが、次の客に席を空け外に出る。小雨の中坂を下り牡丹やその奥にあるまだ色づいていない紫陽花の道を歩く。少しぬかるんだ道は歩きにくいが何十種類もあるという紫陽花の道は捨て難い。小山を切り開いたような庭園には休憩所や句碑や仏塔なども建てられている。

蔓草をものともせずに大夏木　聖子

くちなしの香にぬかりたる築山へ　真理子

楊梅に立ち止まる人過ぎる人　節子

園庭のホースは来に梅雨に入る

真理子

約百五十種類一万五千株の花菖蒲と八十種類の紫陽花の花庭園と説明書きにある。紫陽花はまだ彩なすほどではなかったが、雨をしっとり含み、これから色とりどりに花を咲かせ見物客の目を楽しませるだろう。唐風の門や小山に立つ句碑などは個人的な趣味で作られているので何とも言い難いが、緑の中の散策は気持ちがいい。帰りは道を間違えずに二〇〇号線を上り、八幡西区の「北九州ハイツ」にて昼食・句会を行う。

【大内花庭園内のお座敷】

第三十六回吟行記

平成十九年　七月十二日（木）

参加者　節子　光子　真理子　由紀子

虹の松原・鏡山（唐津市）

空梅雨かと思われた天気から一転、曇りがちな七月となった。台風も九州に近づいていたが、幸いなことに吟行日の十二日は晴れ。旅行会社のパンフレットの美しい海と松原の景色と活きた烏賊料理に惹かれて吟行場所を唐津に決めたが、その景色を楽しむには天気が良いに越したことはない。思いがけず真理子さんから車を出しましょうという申し入れがあり、唐津湾が一望に見下ろせる鏡山に案内してくれることになっていたので、尚更この天気はうれしい。

十二日博多駅から唐津行きの地下鉄に乗る。この地下鉄は姪浜（福岡市）からＪＲ筑肥線になり西唐津（佐賀県）まで乗り入れている。電車は筑前深江駅から海沿いを走る。ゆるやかに曲がった海岸線に沿って夏草茂る小さな駅に止まりながら潮風を入れている。虹の松原駅を通りすぎ、十一時二十五分真理子さんの待つ東唐津駅に着く。真理子さんは福岡のご自宅から四十分ほど車を走らせての出迎えだ。

停車するたび夏の潮匂いくる　　節子

冷房車や、海側に傾いて　　節子

緑立つ虹の松原駅小さく　　真理子

駅を降りると案内人が乗客を呼び込んでいるので何となく同じ方向に行く。その先には団体客用のバスが一台。どうも「唐津ボート」に向かうバスのようだ。あわてて反対側の出口に向かう。真理子さんの赤い車が待っている。一足早に着いていた節子さんも車の中からお出迎え。皆揃ったところで今日の食事処「唐津シーサイドホテル」へと向かうが、すぐ近くに唐津城があるので先にちょっと立ち寄る。桜の青葉が続く石段や店先に「厩跡」の石碑が建っている民芸店を覗いてみる。店先の小さな白い花が印象的だ。店主に尋ねると「おもだか」だという。松露饅頭や唐津焼の看板を掲げたお土産店が何軒か並んでいる城の上り口を見て昼食へと急ぐ。

おもだかを店に育てて厩跡　　真理子

虹の松原の西側にある「唐津シーサイドホテル」は海に面し、レストランからは小山に聳え立つ唐津城や湾に浮かぶ島を一望できる。目の前を浮袋を持った親子連れが行き交い、若者たちが波乗りをして遊んでいる。白く細かな砂が続く浜には浜木綿が白い花を咲かせている。それらを見ながらいただく烏賊の活き造りはほんのりと甘く美味。

夏帽子二つしゃがんでをりし砂　光子

浜木綿の際まで寄せし波の跡　真理子

赤とんぼ波打ち際でユーターン　節子

サーファーに波まだ低き梅雨の海　光子

ホテルの玄関に「のりうつぎ」の白い花が大きな甕に何鉢か植えられている。駐車場はほぼ満杯で夏のリゾート地らしい。駐車場からすぐ横に続く虹の松原を車で抜ける。国指定特別名勝というだけあって約百万本の黒松の群生は見事という言葉しか浮かばない。巾約五百メートル、長さ四、五キロの松林。二～三日前の雨にまだ乾き切っていない松林は緑のトンネルのようだ。十七世紀初め初代藩主が新田開発のために植林し、その後今日まで防風、防砂防潮林として保護育成されてきたという。樹齢数百年の松ばかりでなく幼木もあるが、これらの松が視界の限り根を張り枝を張った様は独特の雰囲気がある。

縦横に幹伸びて松風涼し　光子

唐津には何度も足を運んだことのある真理子さんの車はスイスイと松原を抜け鏡山（二八四ｍ）へと上る。入口の赤い大鳥居から展望台のある山頂までの道は絶好のドライブコースらしく、スピードが出過ぎないように路面をうねらせている。山頂に着くと広い公園になっていて駐車場も広い。鏡山神社、展望台、土産店、芝生広場、桜や紫陽花、躑躅に囲まれた池など市民の憩いの山のようだ。池には餌をやる人が何人かいて、それに鯉、亀、真鴨が群がっている。特に亀は激しく、外来種だろうか首筋に赤い線が入り眼も鋭く、小亀の上に大亀が乗り餌を奪い合っている。

亀かくも手足動かし梅雨晴れ間　由紀子

展望台へと歩いて行く。そこからの眺めはまさに絶景。唐津市街地、唐津湾、唐津城、虹の松原の全景が広がる。よく晴れた日には遠く壱岐までも見渡せるという。湾に浮かぶ手前の小さな島は「鳥島」、ぽっかりと鍋を伏せた形の島は「高島」。この高島は最近多くの人が押しかけている。島の「宝当神社」にお参りするためだ。湾に流れ込む松浦川を遡れば青田や低い山々が連なっている。いつの間にか高島にはぽっかりと雲が乗って

いる。

壱岐までは見えぬ海原梅雨晴れ間　　節子

夏潮のはるか壱岐かもしれぬ島　　由紀子

領巾振の頂高く夏つばめ　　真理子

夏帽のごとき雲乗せ島ひとつ　　由紀子

展望台に上る途中「松浦佐用姫（まつらさよひめ）像」に出会った。湾に向かって手を振る像は、恋人が朝鮮へと船出していく際、この鏡山から領（ひれ）を打ち振り別れを惜み七日七晩泣き続けて、ついに石になってしまったという悲恋物語のヒロインの像というが、悲恋とは程遠い眉目だ。見開いた眼、半開きの口からは歯がしっかり見え、何故このような表情にしたのか首を傾げる。大きな悲しみは人をあのような顔にしてしまうのであろうか。ともあれ佐用姫伝説からこの山は領巾振山（ひれふりやま）とも呼ばれている。

不美人でありし佐用姫合歓の花　　光子

鏡山の中腹にある「ぽんぽこ村　ベゴニアガーデン」に寄る。入口にギョッとするほど大きなケズメリクガメがいる。卵を孵化させているらしい。温室にはベゴニア、横の部屋にはクワガタが展示販売されている。それぞれ多くの種類があるのには驚きだ。これだけのクワガタがいれば夏休みには子供達が多く集まるだろう。唐津の町を後にして海沿いの国道を福岡方面に向かって走る。並行して電車が走っている。二丈パーキングエリアに車を止め「サン・サン・シー」という物産店に入る。小さいお店だが観光協会の看板を掲げている。目の前の浜は「姉子の浜」といって鳴き砂と美しい夕日に大勢の人が訪れる観光スポット。沖には島（姫島）が浮かんでいる。店主の説明を聞きながら飲み物を注文。十句の句会。

姫島にまた夏の雲かかりけり　　節子

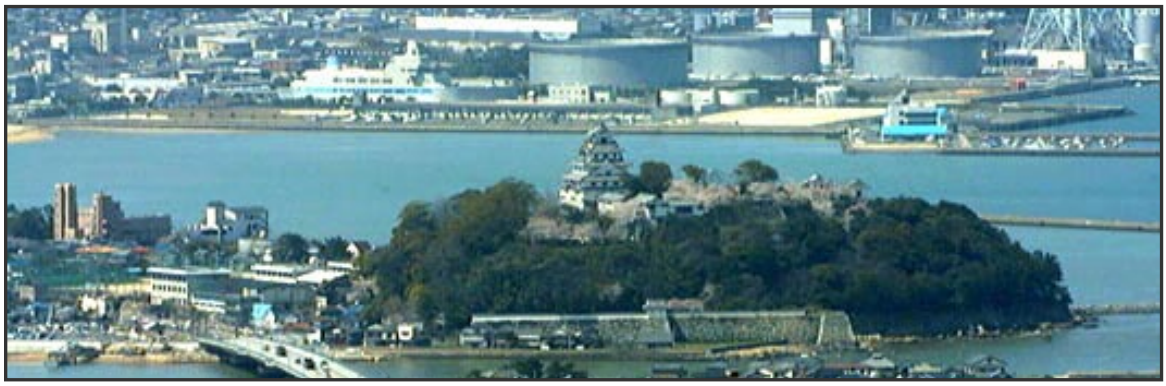
夏草や深江駅家といふあたり　　真理子

句会後、筑前深江駅まで送ってくれる。真理子さんは前原市の山を越えて（?）自宅へと。残る三人はＪＲ筑肥線に乗って博多駅へ向かう。深江

駅ではちょうど博多方面行きの電車が向こう側のホームに入っている。駄目もとで走り込むと車掌が三人を待ってくれている。単線のローカル線ならではのことだが、句会あとの気持ちの良い締めくくりとなる。真理子さんお疲れさまでした。ありがとう。今月は聖子さんが風邪のため不参加。次回の参加を楽しみにしています。

【鳴き砂の「姉子の浜」】

【虹の松原全景】



【唐津城全景】

第三十七回吟行記

平成十九年　八月九日（木）

参加者　佳与子　節子　聖子　光子　真理子　由紀子

若松北海岸・千畳敷（北九州市　若松区）

今年の夏は暑く全国各地で猛暑日が続いている。吟行はどこでもできるが、熱中症のニュースが毎日のように報じられているので、できるなら炎天下を避けたい。まして今月は東京暮らしの長かった佳与子さんが北九州に戻って来られ、新居への引越し作業進行中での参加。涼しさを感じられ且つ歓迎吟行句会に相応しい場所として「あしや句会」第一回の吟行地がよいのではということになり、若松北海岸の千畳敷とその海岸線沿いに建っている「マリンテラスあしや」を吟行地とする。

八月九日十時二十分折尾駅集合。今回は光子さんにも車をお願いし、途中二台の車に分乗して「魚庵　千畳敷」へ直行する。

すでに穂が垂れている早場米の田んぼ道を海岸に向かって走ると、大きな「魚庵　千畳敷」の看板が見えてくる。ゆっくり車のまま門の中に入ると、桜や梅林の庭の先に駐車場がある。専用のマイクロバスが何台か並び、手入れをしていたらしい運転手が私たちの車を誘導。まだ開店前だが前日着く時間を伝えていたので、奥まった入口からすぐ仲居さんが出てきて案内してくれる。木々で覆われた石段の脇には杖や竹箒が整然と立て掛けられている。蝉の鳴くのを聞きながら打ち水された自然石を足元に注意しながら下りていくと、大きな提灯が下がり、太鼓が置かれている玄関が見える。軒には苔や軒忍などの草が生えている。

ここでは慶事の祝いの席も多く設けられるのか、入口の右の部屋は「還暦」「喜寿」と書かれた立板や俵や水引細工などの飾り物が並べられている。大きな金魚鉢のある左側の部屋は待合所になっている。

土間を通り抜けると、この料亭の見所でもある広い芝生の庭がひろがっている。L字型に建てられた本館と芝生の庭の奥にある離れ家があるが、本館の打ち水されたばかりの渡り廊下の一番奥の部屋へ通される。入口に達筆な字で「排句の会　〇〇様」と書かれていたのには苦笑。同じ間違うなら「拝」の字でお願いしたかった。蜉蝣が一匹部屋の中に迷い込んでいる。薄い羽はうすみどり色。じっとして動かない。「俳句の会」に呼ばれた客のようだ。

打水でつなぐ庵のかげろひぬ　真理子

蚊遣香積みて庵の片隅に　佳与子

かげろうの生命の色やうすみどり　聖子

料亭に子供らの声夏休み　由紀子

鳴いている蝉の数だけ蝉の穴　節子

十一時前なので部屋に荷物を置いて庭から海へ下りる。ちょうど干潮時で千畳敷と呼ばれる岩場も随分姿を現している。遮るもののない海では距離感が曖昧になるが、岩場は沖へ百メートルくらいは伸びている。家族連れなどが潮溜まりを覗いたり岩場の潮を見ている。まっすぐのびる水平線には、時折大型船が行き交い、西方の岬には白い灯台、東方には島が浮かぶ。

海鳴りの聞こえし庵に端居して　佳与子

巻きあげし砂を寄せ来る夏怒涛　由紀子

群れて立つ貝に引き行ゆく夏の潮　光子

海沿ひのカンナ蕾の未だ固く　聖子

部屋に戻り昼食。三時まで部屋を使うことができるので、各自吟行して二時までにまたこの部屋に戻ることにする。それぞれに林の中、海岸などに散らばる。

手入れが行届き、ほとんど草の生えていない広い芝生の庭を下って海へと向かう。先ほどより岩場がのび、まさに千畳敷。響灘の波が岩間に打ち寄ぶ。

せる。立秋は過ぎたが、まだまだ日差しは強い。水際で子供が三人浮き輪を持って遊んでいる。海月に刺されたと言いながら海の中でじっとしている。泳ぐでもなくただ暑さを凌ぐために水に浸かっている状態だ。（千畳敷辺りの海は遊泳禁止になっているらしい）砂浜には海草が黒く点々と打ち上げられている。干上がって踏むとカリカリと音をたてる。一人の中年の女性が砂浜を歩きながら何やら拾っている。聞けば「天草」を採っているという。本当は許可証がいるらしいが、少しくらいならと言いつつ浜から引き上げていった。ノートと鉛筆を持った私たちが何をしているのかと問うたので、ドキッとしたのかもしれない。潮溜まりに残された小さな魚や船虫を見て部屋へと帰る。

だれが持って来たのだろう。大きな椿の実がテーブルの上にのせられている。

さばさと蝉の飛び交う森にいて　節子

刺された子海月の海にまた戻り　節子

船虫をちょっと踏む真似佳与子さん　由紀子

秋潮や岩場の泡のすぐに消え　由紀子

のぼりつめ船虫動きとめてをり　佳与子

海松のふさ黄に変わりをり岩畳　真理子

漁師の子なれば遊泳禁止でも　光子

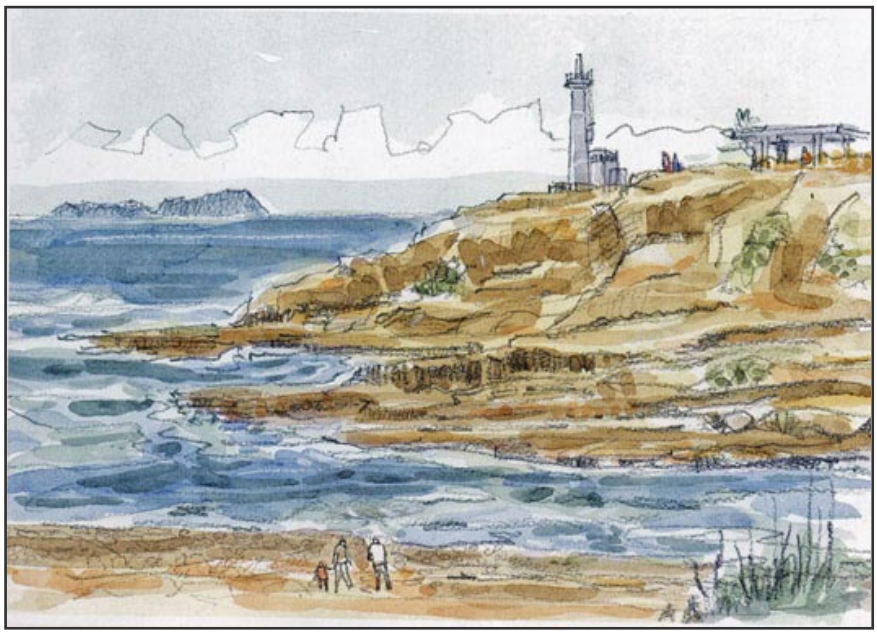
夏深し拾ふ人なき貝の殻　光子

炎昼や人影すでになかりけり　聖子

部屋にて十句出句、清記まで済ませる。退室の時間がきたので精算をして第二会場「マリンテラスあしや」に向かう。総ガラス張りの「マリンテラス」のコーヒーショップから芦屋漁港や響灘の波が寄せる遊歩道を見ながら、再度句会を始める。「あしや句会」に佳与子さんが参加ということで、皆最初から俳句モード。うーん！すごい！

三人で始めた「あしや句会」は、聖子さん、真理子さんの参加、そして

今回の佳与子さんの参加で、だんだん充実したものになっている。出句も三句から十句となり、もうそれが当然のようになりつつある。この変化は俳句をやっていくうえでとても大事なことで、取り合えず十句作れるという力なくして吟行句会を楽しむことはできない。仲間あっての俳句会。まずは裸の付き合いでということで、今回も「マリンテラス」の温泉で句会をゞる。皆さんこれからも宜しくお願いします。



【若松北海岸の風景：出典「北九州 101 景」西川幸夫】

第三十八回吟行記

平成十九年　九月十三日（木）

参加者　佳与子　節子　聖子　光子　真理子　由紀子

マリンワールド海の中道（福岡市東区）

今月の吟行地は水族館。水族館の中は季節感がないので俳句を作りにくいという話もでたが、格別残暑の厳しい中、快適に一日を過ごせる場所を優先し、博多湾に突き出ている国営海の中道海浜公園内にある水族館「マリンワールド海の中道」に決定。

当日佳与子・光子・由紀子の北九州組は折尾駅にて集合。十時二分発の快速に乗り香椎駅にて乗り換え。上り下りを間違えないように駅員に確認してからJR香椎線（西戸崎行）の二両電車に乗り込む。電車内はまばらで外の景色がよく見える。和白駅あたりから博多湾が見え始め、穏やかな海と線路沿いのフェンスに絡む葛の花や出始めたススキの穂に、外は三十度を越す暑さとはいえ初秋の小旅行の始まりを感じる。やがて電車は砂浜と松林の中を走り両側に海が見える。細く低い松を海風から守るためなのか、しっかりとした柵が幾重にも施され続いている。二十分程で集合場所の「海の中道駅」に着く。そこは無人駅で切符は目安箱のような小さな箱に入れる。通称「うみなか」と呼ばれるこの公園は、以前子供達が小学生の頃何度か遊びに来たことがあるが、広大な敷地にプールや動物・花の広場、子供の広場などがあり、思いっきり楽しめる公園。その入口の「海の中道駅」は小さくカラフルで、まるでおもちゃの駅のようだ。先に着いていた節子さんや真理子さん・聖子さんと合流する。

よく揺れる西戸崎線秋の晴　　節子

秋の潮香る無人の駅に待つ　　節子

砂止めの柵幾重にも浜の秋　　光子

秋日傘海辺の駅に降り立ちて　　光子

ハイビスカス咲いて無人の海の駅　　真理子

線路を跨いで桜の並木道を通り抜けると、大通りの向こうに白いホテルと波打った形の水族館の屋根が見える。食事の時間には少し早すぎるので、予約のみしてホテルの庭を散策する。ホテルは今年八月に名前が変わり、外装も内装も南国風に変わっている。パームツリーやハイビスカスなど南国の木々や花が植えられ、広い青芝の庭は博多湾に面している。福岡のリゾートホテルとしてロケーションは抜群で、当日対岸の博多の街は少し霞んではいるが、ヤフードームや

福岡タワーが湾ごしに見える。波打ち際まで下りて行く。緩やかに打ち寄せる波にアオサが揺れている。横の桟橋にちょうど連絡船が着き乗客が降りてくる。対岸の博多港からの連絡船。帰りはこの船に乗って天神経由もありかなと思いつつ、ホテルのレストランに引き返す。

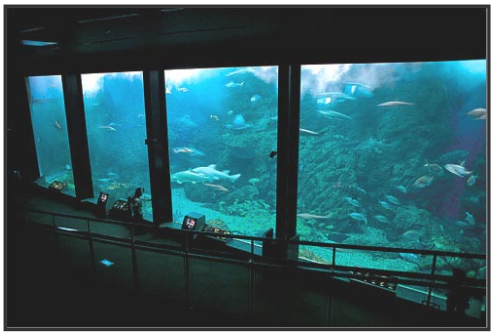
階段の際にまで寄せ秋の波　佳与子

新涼や改装なりしレストラン　佳与子

浜辺へとつづくホテルの芝青く　由紀子

桟橋に今船の着きいわし雲　由紀子

天高し機影静かに遠くなり　聖子



昼食は目の前で揚げてくれる天婦羅。真理子さんの北信越ホトトギス大会に関連した三国の「森田愛子」や「虹」の話を聞きながら美味しく頂く。昼食後、ホテルの横にある水族館へと行く。皆節子さんの出題したクイズに正解したらしく割引価格で入場。幼稚園児らしい団体客もいたが、平日にもかかわらず若者達が結構来館している。混雑しているほどでもなく、閑散としているほどでもなく、程々の来場者で、迫力あるパノラマ大水槽や、「対馬暖流」を展示テーマに三五〇種類二万点の海の生き物を、映像、音響機器、水中カメラなど豊かな展示方法で楽しく学べるようにしている三階建ての水族館を上へ下へと各々興味のある所へ見学。イルカやアシカのショーは博多湾を背景にして行われ歓声が聞こえてくる。

秋天の下真っ白な水族館　節子

秋の山はるかにイルカショーを待つ　真理子

秋天にイルカの高く丸く跳ね　光子

餌なる鰯落ち行くイルカショー　聖子

カブトガニ番号貼られ浜の秋　由紀子

ちょと動くひらめの目玉館涼し　佳与子

句会は水族館一階のセルフサービスのカフェにて行う。真横にイルカショー用の水槽プールがあるので、イルカが勢いよく飛び込み泳ぎ回っているのが見られる。水族館の句会場として最適だ。連絡船に乗る時間はなくなった

が、ゆっくり海の生き物を眺めるのは面白い。海の世界を満喫して外に出ると、少し涼しくなった風が吹き渡っている。余韻は残るが、帰りの電車の時間が迫っている。足早に駅に行くと二～三分して電車が入ってくる。一時間に二本の便数だからホッとしながら、節子さんらが収穫して持ってきてくれた唐辛子や茄子などを分け合う。皆すでに主婦の顔になり野菜を手にして香椎駅にて解散する。

実習の唐辛子とや輪に干して　　光子

【イルカショーのプール】

【カブトガニ】

【ＨＰのトピックスに掲載した「鷹の渡り」】

第三十九回吟行記

平成十九年　十月十八日（木）

参加者　佳与子　節子　聖子　光子　真理子　由紀子

北九州美術館・高見神社（北九州市・八幡東区）

佳与子さんが北九州に新居を構えて三ヶ月近く経つ。新居は「高見」。新日鉄が官営八幡製鐵所として建設された頃製鐵所用地となった為に、この地区に遷座された「高見神社」や所長官舎を頂点にその下に管理職官舎などが建ち並んでいた場所だけに、「高見」は新日鉄関係者にとっては特別な地区。現在古い社宅群は取り壊され、入口にいた守衛もいなくなったが、三棟の社宅とマンションや戸建住宅の高級住宅街に変わっている。裏手の小高い山は雑木林だが、遊歩道が整備されていて抜ければ「北九州市立美術館」に出る。自然に恵まれた「高見」をゆっくり散策しようと以前から話にはでていたが、住人の佳与子さんならではの情報で、句会日の第三木曜日の十月十八日は高見神社の「秋季大祭」というので、さっそく吟行することに決まる。

当日十月十八日福岡組は八幡駅下車。高見のスーパーマーケット「スピナ」（旧テツビル）の駐車場にて十時半集合する。朝方の急な冷え込みに皆長袖やスカーフを身につけている。十月になっても最低気温が二十度を越えていたので、まだ夏物でもよかったのだが、さすがに朝夕は肌寒くなってきている。待ち合わせの駐車場の桜の葉も黄ばんでいる。高見神社の「神輿御神幸」は午後4時からなので、午前中は裏手の美術館やその周辺を散策予定。神社から続く山道をゆっくり上るのもいいが、午後からの高見周辺の吟行を考えると無理をしない方がいいということになり、車二台に分乗して美術館へと行く。高台にある美術館は眼下に響灘や北九州の工場群を見渡せる。建築家・磯崎新氏の「丘の上の双眼鏡」と呼ばれる斬新な美術館も見慣れてくると特に感慨もないが、入口付近に咲いている一本の桜に目を凝らす。「十月桜」の立て札が真新しい。すでに満開は過ぎているが、秋の澄み渡った空に淡く咲いている桜は、春とはまた違った趣きで楚々としている。桜を見ながら、森から聞こえてくる鳥の声を聞きながら、それぞれに持ってきた「おやつ」を分け合い美術館前の階段でいただく。これがまた美味しい。

散り初めの十月桜色濃くて　　聖子

公害の街とは昔秋晴れて　　佳与子

美術館の双眼鏡といわれる片方部分の展示室に入る。窓の明かりのみの薄暗い部屋には、手で触っていいのかと思えるような仏画やデザイン画などの書籍が並んでいる。館内は「書展」があっているが訪れる人は少な

く静かだ。美術館の周辺には、ブロンズ像や彫刻や凡人には訳のわからない鉄屑を積み上げただけのような現代アート作品などいくつかのモニュメントが野外展示されている。それらを見ながら高見神社に続く裏山に少し足を伸ばす。やしゃぶしが青い実をつけ、まだ青々とした楓の葉が木洩れ日に時折揺れている。

秋桜書展第一企画室　佳与子

小鳥来る美術の森の母子像　由紀子

昨夜の雨落葉しそめし道にあと　光子

美術館裏の小径やめじろ鳴く　節子

落葉道ロマンチックになれなくて　真理子

美術館からまた元の高見の駐車場に戻り周辺を散策する。大通りに沿って流れている板櫃川の水辺に下りて行く。この川は豊前の国と筑前の国を分ける川だったらしい。自然を残した川の水は澄んでいて小魚が泳いでいる。数珠玉や溝蕎麦、野菊など秋草の中に流れる川。白鷺や蜻蛉もいる。

秋の野も森もありけり鉄の街　光子

数珠玉の玉と呼ぶには柔く　聖子

昼食は住宅街の一角にある「都や」。大きな看板を掲げていないので車で行くと見過ごしてしまいそうなお店だ。「道場六三郎」の書が廊下や部屋に飾られているのが印象的な小奇麗な和食処で、佳与子さんが下見を兼ねて何度か足を運んでくれている。三時まで部屋を使えるのでここで十句の句会。

句会後は高見地区の住宅を通り抜けて神社へと向かう。北九州の桜の名所と言われたほど美しい桜並木は僅かしか残っていないが、新しく植えられた桜の木や花や庭木の多い街並みは美しい。雨水を流す側溝はポンプで汲み上げて流す「せせらぎ」で自然の小川のように作られている。この日水は流れていなかったが、紫式部の小粒の実が色づき、植えられている花木を楽しむ。一角に「藤袴」の咲いている道がある。下見の時にたまたま見つけたのだが、そこで「アサギマダラ」が乱舞していた。今日はどうかなと覗くとまたしてもアサギマダラがいる。

「国境石」と旧市長公舎を通り過ぎて

「高見神社」の鳥居にたどり着く。こんもりとした森の中にある神社の階段を上る。静かだが「高見大神宮」の大きな旗に否応なく祭りの昂りを感じる。本殿前には三台の樽みこし、奥に神輿が置かれている。ちらほらと稚児たちが控え室から出てきて神輿の前で写真を撮りだした。この大祭には我が家の子供達も稚児の装束を着て参加したが、当時は親子共々着飾り人数も多かった。今装束を着た子供たちの足元は皆歩きやすいズックで、付き添いの母親達も幼稚園のお迎え姿で特別な日という感じではないが、手に皆カメラを持っている。

稚児姿ちらほら秋の祭前　　真理子

おがたまに人増えてきし秋祭り　　真理子

秋祭稚児装束のVサイン　　光子

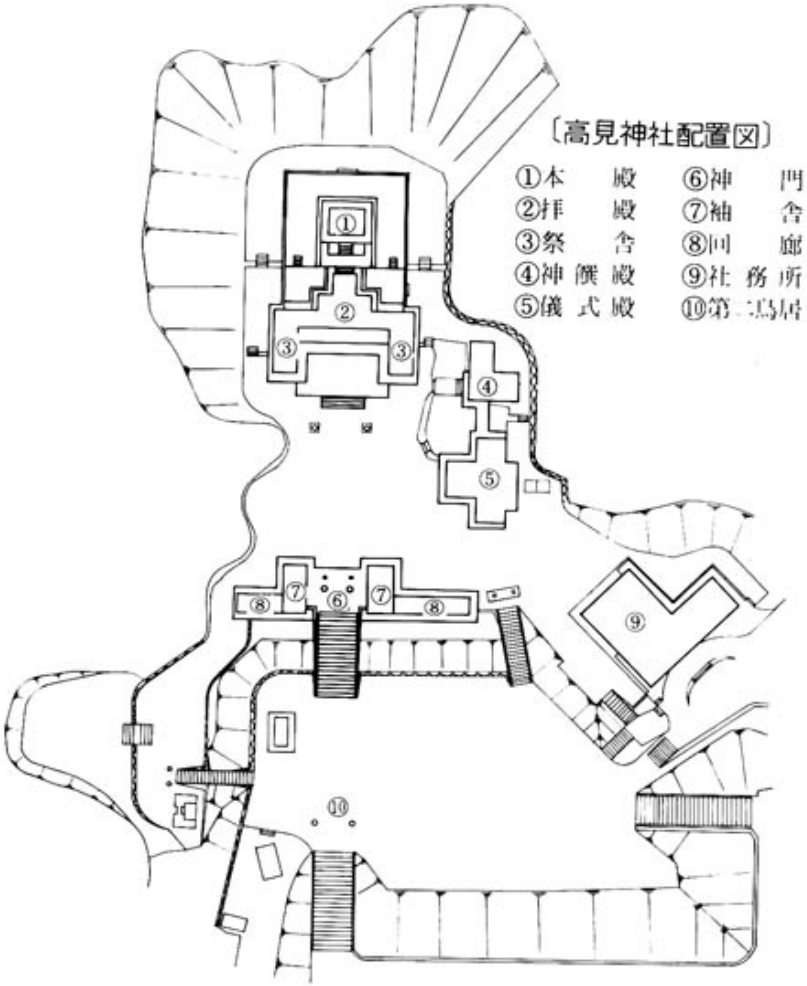
地下足袋もはっぴも真白秋祭り　　節子

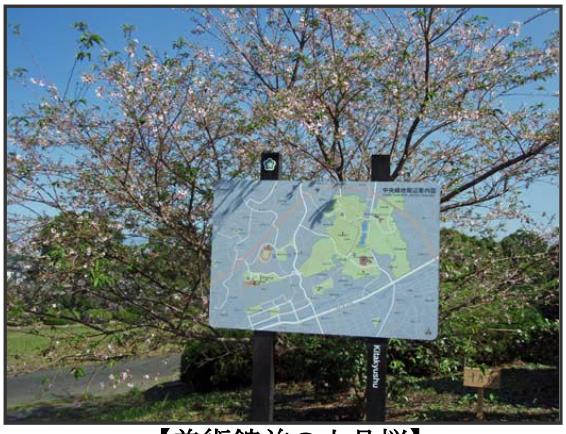
爆竹の音に始まる秋祭　　節子

秋祭り神輿担ぎの点呼かな　　由紀子

神輿を担ぐ男衆たちの一団が本殿前に集まりだした。聞けば新日鉄の社員達だという。赤いお面の天狗もいる。下の広場に行くと青い法被の子供達が列をなしている。関係者がマイクで注意事項など伝えている。午後四時十分に行列が始まるという放送があるが、祭り前の様子に満足し、佳与子さんの新居に伺う。途中新しい所長官舎や「高見倶楽部」（杉田久女が楊貴妃桜の句を作った旧公餘倶楽部）の前を通る。新居の九階から見る景色は素晴しい。緑が多く散策に事欠かない地区に住む佳与子さんをちょっぴり羨ましいと思いつつ高見を後にする。

【高見神社本殿】





【美術館前の十月桜】

【国境石】

【神楽殿】

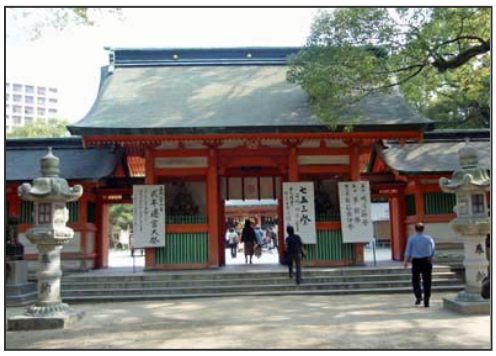
【ＨＰのトピックス掲載「大分県・中津市　三光コスモス園】

第四十回吟行記

平成十九年　十一月十五日（木）

参加者　佳与子　節子　聖子　真理子　由紀子

住吉神社・楽水園（福岡市博多区）



先月の高見神社のお稚児さんを見た後ではあるが、句会定例日の第三木曜日が十一月十五日。迷うことなく十一月の句会は「七五三」吟行することに決まる。今回は博多駅から歩いて十分程の「住吉神社」。この神社は約二千社あると言われる「住吉神社」の中で最も古いとされ、大阪、下関と並んで日本三大住吉のひとつである。神社仏閣の吟行が多くなるが、その土地の歴史が最もわかりやすく、祭礼など行事も多く句材も多い。

十一月十五日十時半に博多駅の「博多口」に集合。駅前の大通りを左方向に沿って歩く。「博多全日空ホテル」を通り過ぎると、こんもりと楠の木が枝を広げているのが見える。鳥居を潜ると「博多古図」の複製パネルが掲示されている。それを見ると千年以上歴史のある神社で、「航海の神」として信仰を集めていたことがわかる。楠の大樹で覆われた広い境内は賑やかな博多駅近くであることを忘れさせる。

本殿前には園児たちが禰宜の見守る中、付き添いの先生から神社にお参りする作法の説明を受けながら列をなしてお参りしている。いつもはひっそりとしている境内には「七五三」らしく童謡が流れていて写真屋も暇そうにはしているが一式道具を置いている。何組か和装姿の親子がお参りしている。大太鼓が鳴らされご祈祷を受けている親子もいる。「七五三」に付き物の「千歳飴」を持っている子供がいない。美味しいお菓子がいつでも食べられる現在では、縁起物の「千歳飴」は形だけのものとなり実際に買う人が少なくなっているのは仕方ないことだろう。

千歳飴持たぬ子ばかり宮参り　由紀子

お賽銭にぎりしめをり七五三　真理子

祝詞にもあきし小欠伸七五三　佳与子

和食処「KOGA」でゆっくり昼食を済ませた後、朱塗りの橋「住吉橋」辺りを吟行する。橋からは博多の観光名所になっている「キャナルシティー」やその先に歓楽街中洲が見え、昔から博多の台所といわれている「柳橋連合市場」も近くにあるなど、雑然と博多の新旧の姿が混在している場所。晴れ渡った空が気持ちよい。

中洲へもいける川風冬ぬくし　　節子

煤けたる常夜灯ある冬の川　　由紀子

もう一度「住吉神社」に戻る。こちらの大鳥居が正面らしい。参道には露店が二つ寂しく並んでいる。境内の「一夜乃松」や稲荷神社などをぐるりと廻ってから、裏門から道を隔ててある「楽水園」へと向かう。ここは明治時代に建てられた博多商家の別荘を茶室棟として改築した美しい日本庭園。秀吉が博多の復興の際、兵火による焼石、焼瓦を粘土で固めて作った独特の「博多塀」といものがあるが、これを再現した塀で囲まれた園内は水琴窟や小滝のある池泉廻遊式庭園となっている。お抹茶をいただきながら薄紅葉や石蕗の花、まゆみの実やハクサンボクの赤い実をしばらく眺める。

つわぶきの花の黄猛々しきまでに　　聖子

止め石に木の実落ち又木の実落ち　　聖子

指先に少しざらつき椋落葉　　聖子

今月の兼題が「蓮根掘る」だったので、福岡城址のお濠の枯れ蓮を見ようという話になった。思いがけない提案に大喜び。地下鉄に乗り「大濠公園駅」で降りると目の前に枯蓮が広がっている。びっしりと緑色の小さな水草が浮き、その上に落ちた枯蓮の実が乗っている。枯蓮のお濠を天神方面に向かって歩いていくと大手門。修復しているらしく工事のトラックや作業の男の人たちがいる。大通りの歩道から一段下がって散歩用の道があるので、そこをのんびり歩いたり石に腰掛けたりできる。桜の季節は濠がピンク色になるほどの名所だが、蓮の名所でもある。花の季節もいいが、桜紅葉や櫨紅葉を見ながらの枯蓮もまた良し。これだけで満足していたところ、私達に見せるかの如く、修復の作業中と思っていた男四人がお濠の中に入り、呼び名はわからないが、筏のような板舟を引きずりながら枯蓮を刈りだした。初めて見る光景に皆釘付けになり、刈る様子や積む様子など見る。

案外と浅きお濠や敗荷刈る　　佳与子

刈られゆく敗荷夕日ひろがりて　　佳与子

枯れ蓮の実の落ちて浮く濠端を　　由紀子

枯蓮を刈る板船の傾きて　聖子

蓮刈りの枯れし花托をなげくれて　真理子

短日の蓮を刈る船かたむけて　真理子

枯蓮の刈り取り作業はかどらず　節子

刈りてなほ奥にはだかる枯蓮　節子

冬陽が傾き始め、すぐに薄暗くなるだろうが、なかなか作業ははかどらない。まだ見ていたいが句会や帰宅時間もあるのでお濠を後にする。「名島門」と呼ばれる御門を通り、急遽決めた大濠公園内のレストランで十句の句会。

公園内を犬と散歩する人、ジョギングする人、池に飛び交う鳥などを見ながらの句会場にも大満足。薄暗くなった公園を後にそれぞれに家路へと向かう。光子さんは仕事のため欠席。残念だったが、次回の忘年吟行句会を楽しみにしている。

【住吉橋】

【博多塀】

【ハクサンボクの実】

【楽水園内風景１】

【舞鶴公園のさくら紅葉】

【楽水園内風景 2】

【大濠公園内の散策道路】

【楽水園内風景 3】

第四十一回吟行記

平成十九年　十二月四・五日（火・水）

参加者　佳与子　節子　聖子　光子　真理子　由紀子

関門海峡・長府　（下関市）

毎月の吟行を記録として残そうと吟行記を書いているが、書くのはいつも投句締め切りの二十日を過ぎ先生からの御選も届いてからなので、吟行してから日にちが経ち大まかなことは忘れてしまう。すぐ書けばよいのだが、これは性格によるもので、せっぱつまらないと動かない。我ながら困ったものだと思いながら、この性格で五十五年近くなんとかやってきた。

前置きが長くなったが、十二月は早々と四・五日に吟行したので、ちょうど一ヶ月前のこと。年末年始を挟むと随分前のような気がする。記憶をもとに皆の句を読み返しながら再度あの日のことを思い出している。

十二月の忘年句会は一泊しようということになり、メンバーの日程調整、ホテルの手配など節子さんが取りまとめてくれる。吟行地は関門海峡と山口県の城下町「長府」。宿は関門橋が眼下に見える国民宿舎「海峡ビューホテル」。十二月四日　門司港駅十一時に集合。すぐに門司と下関を繋ぐ連絡船乗り場に向かう。海風が冷たいがその冷たさの中、船に乗り込むと十分旅をしている気分になる。二十分おきに出港する連絡船に乗客もそこそこにいる。九州の門司から本州の下関に渡るには本数の少ない電車より便利だ。

本州へ小船で渡る年忘　　節子

桟橋の北風に寄り合い船を待つ　　真理子

下関側の桟橋に降り立つと、左に水族館、右に河豚の競りで賑わう「唐戸市場」。昼の魚市場は競りはとっくに済み片付けもほぼ終わりがらんとしている。魚料理のレストランが市場の二階にあるので行ってみるが、ここは込み合っている。横の食事処・お土産屋の並ぶ「カモンワーフ」で昼食。目の前の海峡を行き交う大小の船や対岸の門司港レトロの街並みを見ながら、門司・下関地区が美しく観光化されたことを実感する。

下関市内には、源平合戦や幕末の長州藩の謂れある旧跡が点在しているが、今回は海峡に沿って吟行する。唐戸市場から大通りを隔てた所にある「春帆楼」に歩いて向かう。ここは明治二十八年三月「日清講和条約」の会場となった場所で、当時使われた調度品や貴重な資料が「日清講和記念館」に保存されている。「春帆楼」は戦災で全焼し復興したが、現在の建物は昭和六十年に全面改装されたものらしい。庭には秀吉によって禁止されていた河豚料理を、伊藤博文によって公許された記念として「ふく料理公証第一号」の像が建立

されている。その横に「李鴻章道」の立て札。

河豚の糴すみし市場の旗風に　　真理子

さねかずら李鴻章道といふ小径　　節子

清国の全権代表「李鴻章」が暴漢に襲われた後、大通りを避け宿舎まで山に沿った小径を利用するようになったという道だ。当時と様子は変わっていようが石蕗の花が所々に咲いている細い道で、とりあえず歩いて行くと「藤原義江記念館」の矢印がある。ここまで来たからにはこもという事になり、細い石段を登って行く。結構きつい。辿り着くと門扉に「休館」の札が下げている。足の疲れですぐ引き返す元気もなく、芝生の庭が気持ちよさそうに広がっているので中に入ってみる。庭に立つと遮るものがなく海峡が見える。庭の風見鶏に「漂泊者のアリア」と刻まれた義江のモニュメントが立っている。ここから義江の美声が海に向かって流れたのであろう。古めいた洋館に人の気配は全くないが、冬薔薇や石蕗の花に何かしら安らぐ。

戸の閉まる音空耳か冬館　　光子

登り来し館休館冬そうび　　真理子

古びたる白亜の館冬薔薇　　聖子

枯芝に影の伸びゆく風見鶏　　由紀子

「春帆楼」のすぐ横に安徳天皇をお祀りしている「赤間神宮」がある。珍しい真っ赤な龍宮造りは幼くして悲劇的な最後を迎えた安徳天皇を慰めるための造りらしい。境内の片隅には壇ノ浦の合戦に敗れた平家一門の墓（七盛塚）やこの神社に住んでいた琵琶法師（耳なし芳一）の「芳一堂」などがある。茶店で甘酒やぜんざいを注文。冷えてきた体を暖める。バスが頻繁に通る大通りで、バス停も神社入口前にあるので、神宮の入口にある由来などを読みながらバスを待っていると「国民宿舎行き」のバスが目の前を止まらずに通り過ぎた。これには慌てた。「国民宿舎行き」のバスは一時間に一本だ。バス停のベンチで待っていなければ乗るとは思われなかったのだろう。仕方ないので来たバスに乗り、二停留所目の「御裳川（みもすそがわ）」バス停で降りる。

団体の客どかどかと落葉踏み　由紀子

供華台の石に冬木の影さして　光子

暮れ早し宿へのバスに乗り遅れ　佳与子

バス停に取り残されて着膨れて　節子

「みもすそ川」バス停はちょうど壇ノ浦古戦場を眼前に臨む公園や関門トンネルの人道入口があり、ここも吟行地として最適な場所だ。ただここから宿の「国民宿舎」まで少々登らなければならない。冬紅葉、枯木立、木の実落つ、等など季語を頭に浮かべながら荷物を手に坂道を行く。

「海峡ビューホテル」の名前通り海峡や関門大橋が見える。夜は「河豚料理」に温泉。これだけでも満足なのだが、宿のサービスとして「夜景ツアー」のバスを出してくれるという。今は休館中の「火の山ロープウェー」の展望台までのコースで、他の客の利用がなく貸切状態。着いた展望台は外灯のみ。個人では決して行かない場所だが、そこから見る夜景は本当にすばらしい。関門大橋を挟んだ港の灯はもちろん遠く小倉・皿倉山など北九州の市街地の灯や反対側の周防灘の北九州空港の灯・山口の山側の灯など三六〇度の夜景。前日の雨で空気が澄んでいるらしく「巌流島」までうっすら見える。空の星と夜景に寒さも忘れる。部屋で十句の句会。

着膨れて夜船絶えざる海峡に　真理子

海に道しるべの冬灯点々と　真理子

凍て星の光降り来る我が掌にも　聖子

同じ旗たてし小船の冬波に　佳与子

冬の日の出は七時半くらい。周防灘の方から茜色した雲が立上り、海峡には大小の船が行き交っている。三角の旗を立てた小船が目立って多い。海峡の朝の景色をゆっくり見ながら食事を済ませチェックアウト。二日目は十キロ先の長府の町を散策予定。バス停のある「みもすそ川」まで歩いて下り、長府行きのバスに乗る。

「城下町・長府」の歴史は古く見るべき史跡が多くあるが、時間が限られているので、「忌宮神社」「乃木神社」から土塀（練塀）の「横枕小路」を通り抜けて、長府毛利家の菩提寺の一つである「覚苑寺（かくおんじ）」に行く。紅葉寺として有名な寺でまだ紅葉が美しいかもし

れないとの思いがあったが、銀杏黄葉と多少の紅葉が色を添えているほどだった。境内は広く銅像や和同焼の窯元もあり、風格のある神社だ。付近一帯は日本最初の貨幣和同開珎（わどうかいちん）の鋳銭所があった所らしい。

竹爆ぜる音して社年用意　　節子

竹爆ぜる音にも怖じぬ冬の鳩　　真理子

観音を辿る山道木の葉散る　　光子

寺坂に並ぶ地蔵や冬ぬくし　　佳与子

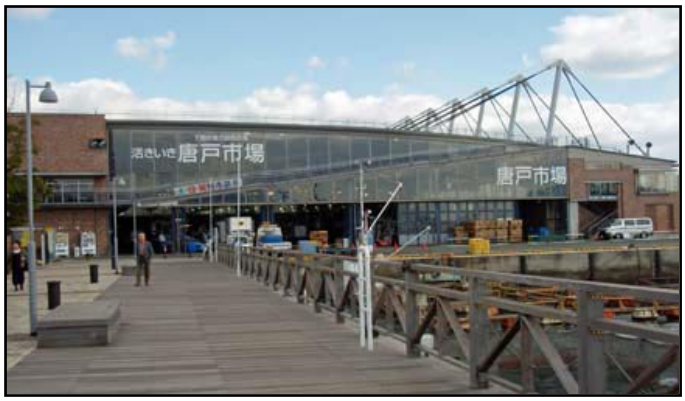
「長府毛利邸」を通り過ぎ「古江小路」を歩く。ここには侍医兼侍講職を務めた格式ある菅家の長屋門が残されている。通りは土塀（練塀）が続く城下町らしい町並みで観光コースの一つだ。歩きながら雰囲気の良い食事処を探す。長府には庭園をみながら美味しい食事のできるお店がいくつかあるので歩いてみるが、定休日だったり遠かったり。この辺りで休もうということで、目の前の檀具川沿いにある「祥（しょう）」という鄙びた店に入る。入るとまずかったかなと思わせるほどゴチャゴチャした部屋を抜けると、古布を使った小物や着物をリフォームした服が部屋部屋に置かれている。置物や額は年代物である。聞けば築百年以上する桂弥一の旧宅で、私たちが入ったのは店の裏口だったらしい。正面玄関は人力車が置かれ旧宅らしい構えをしている。鄙びた匂いが少し気になったが、歩き続けた体に安くて美味しい昼食と珈琲は美味しかった。檀具川に鴨が群れているのを所々に見ながら大通りまで歩き、バスで唐戸桟橋へと向かう。すぐに連絡船で門司港まで戻る。

本州に見える九州冬ざれて　　節子

水鳥の喧嘩見てをり冬の川　　由紀子

九州に帰る渡船の古暦　　節子

門司港駅構内にある喫茶店にて句会。
楽しい忘年句会でした。企画ありがとう。



【唐戸市場】

【門司港渡船ターミナル】

【「春帆楼」内の河豚像】

【「春帆楼」入り口】

【「赤間神宮」本殿】

【「御裳川公園」内の大砲】

【「覚苑寺」境内の「乃木希典」像】

【和同焼ののぼり窯】

【長府毛利邸】

【「覚苑寺」本堂】

【横枕小路】

自選句

（十四～十九）

自選句　十四

「平成十八年十二月投句」より

入口に「静」の一文字冬紅葉　由紀子
消防の鼓笛隊来る街師走
売りに来る荷台に選ぶ冬菜かな

池の面は星空の如時雨来て　光子
雨上がる冬木に光る粒なして
紅の棘は真紅の冬の薔薇

冬の時刻むが如く花の落ち　聖子
顔見世や早や一年の過ぎにけり
ビル谷間残されし庭枇杷の花

ときに身を流れに任す鴨のいて　節子
ぽたぽたと雑木の雫冬の雨
今日からはいいことばかり冬至かな

篠垣の潰れ山茶花咲きこぼれ　真理子
一木の長きベンチや冬の雨
見上げればパパイアに実や冬ぬくし

「平成十九年一月投句」より

願うより感謝のこころ初不動　光子
ホットケーキシロップ追加春隣
寒椿庭師に詫びを言えぬまま

現代風の子も福引の縁起物　聖子
春隣しだれる枝の先までも
法善寺水掛不動寒の雨

寒風を一身に受け日蓮像　節子
参拝の列に冬の日射し始め
ラグビー場一瞬草匂うとき

参詣の列さらに伸び初戎　真理子
一足の靴脱ぎそろえ寒詣
さよならと言わずに帰る寒の月

鷺替えの輪よりはじかれまた中へ　由紀子
沈鐘の伝説いまも冬の海
福引の当たりの声に福もらい

自選句　十五

「平成十九年二月投句」より

千光寺石段長き余寒かな　聖子
鞆の浦路地より覗く春の海
豆まきも「祝いめでた」でメとなり

ひきりなし二艘の渡船春の海　節子
瀬戸内の風吹き上げる春山に
ドックより響く槌音春の海

春風の蔵より浦の子らの声　真理子
雁木より春の潮引く鞆の浦
豆撒きの小餅頭上に飛んできし

渡船行き交う瀬戸や野水仙　由紀子
潮を出るあおさをつけし舫い綱
春浅し瀬戸の島々魚干す

山焼くや鍾乳石の永き時　光子
春潮の返す光や観音堂
春月のこぼせししずく星ひとつ

「平成十九年三月投句」より

春風やつり皮下がる渡し舟　節子
駅裏はすぐ渡船場春の街
嫁ぐ娘は昨日の我雛飾る

草餅の湯気吹きまわる集合地　真理子
離れたり寄ったり五本の春の傘
芽楓の雨粒に紅ことごとく

ダンスする人ゐてフロア春灯　由紀子
橋桁の貝殻に寄す春の波
草を食む山羊の白鬚山笑う

自転車を渡船に乗せて卒業す　光子
「眺め良し」春の波止場にビル売られ
合格の張り出さる日の春の雪

雛菊に聞く来る来ぬか来ると決め　聖子
春風邪に咳の止まらぬカフェ店主
韮切りし刃先鋭く匂い立ち

自選句　十六

「平成十九年四月投句」より

嬉しげに虻飛ぶ小さき藤房に　真理子
かくれんぼして木苺の花の中
美しき冷茶のみほし春惜しむ

三越のライオンに待つ朧の夜　由紀子
信号の青で来る彼朧の夜
花吹雪露店をたたむ男にも

山繭の羽織を形見分けとして　光子
この婆でなくば紡げぬ山の繭
春灯下つがいの鶴を折りにけり

姉帰国先ずは茶漬や花菜漬　聖子
デジャブかと思える町の春夕べ
海棠の君と呼ばれし友の在り

帰り道白い蝶々とすれ違う　節子
藤の枝結びつけるも藤の蔓
みな食べられそうな春の草の中

「平成十九年五月投句」より

劇場の奈落より出て若葉風　由紀子
掘ればすぐ筍茹でる女房かな
海峡に先帝祭の法螺の音

バスやめて歩く街道夏の風　光子
贅尽くす屋敷の孤独白牡丹
芝居小屋席のいろはに若葉風

川べりの闇深くして朴の花　聖子
待望の男子誕生粽巻く
踊子草これが花笠これが顔

この鳩も若葉の木陰好きらしい　節子
絶縁状美しき文字蓮の花
山の名を駅の名にして踊子草

緑陰に神楽待ちをり漁師町　真理子
赤米の田植えすみたる怡土の空
雨にその色薄まりて踊子草

自選句　十七

「平成十九年六月投句」より

阿蘇五岳右にのぞみて大夏木　光子
つくばいに梅雨そそぎ入る竹の先
おろしたて雨靴梅雨の泥よけて

山梔子の花に見惚れて泥道に　聖子
六月や博多の町に長法被
老鶯の声薄闇に消え行けり

子雀の代わり番こに飛びはねて　節子
早苗かご道に次々下ろされて
代を掻く農機具がふと牛に見え

忍冬途切れ途切れに山の雨　真理子
園庭のホースは束に梅雨に入る
払いたる蚊の紫に花の陰

仏塔も句碑も埋もるる濃紫陽花　由紀子
屋根を越す木々より匂う忍冬
葦平の描きし河童絵夏木立

「平成十九年七月投句」より

虫かごの中に小さき森できて　聖子
足裏に梅雨の張り付く心地して
枇杷の実の只朽ち行きぬ網の中

停車するたび夏の潮匂いくる　節子
姫島にまた夏の雲かかりけり
窓からは寝冷えしそうな風のあり

領巾振の頂高く夏つばめ　真理子
海霧の流れ消しゆく夏の島
磨かれし万葉の碑の梅雨の文字

雲のせて湾に浮く島夏の潮　由紀子
浜木綿や古人の飾り玉
墨吹くと注意書きあり烏賊生簀

夏帽子二つしゃがんでをりし砂　光子
夏雲の影のかたちに海の色
サーファーに波まだ低き梅雨の海

自選句　十八

「平成十九年八月投句」より

落ちて来し蝉地を低く低く飛び　由紀子
船虫をちょっと踏む真似佳与子さん
秋潮や岩間の泡のすぐに消え

水平の大いなる弧や夏の海　光子
夏深し拾ふ人なき貝の殻
荒布干てカリと音立て磯辺かな

サンダルの砂払いつゝ晩夏とも　真理子
岩畳描き出しゐる秋の潮
寄せる波引く秋の波音染みて

海沿いのカンナ蕾の未だ固く　聖子
唐黍の葉も萎れ行く真昼かな
かげろうの生命の色やうすみどり

秋の雲次の駅までついて来し　節子
水の引くごと船蟲の消えにけり
墓掃除いつも出てくるエピソード

軒灯篭吊るし玄関開けてをり　佳与子
挨拶状晩夏の候としたためて
かささぎの渡来の鳥として親し

「平成十九年九月投句」より

今朝の夢思い出せずに鉦叩　光子
無駄な線ひとつもなきや草かげろう
砂止めの柵幾重にも浜の秋

草伸びし庭に厳しき残暑かな　聖子
水くらげ光透かせて光りをり
野分来て尚も眠れぬ旅の宿

とまるまで目で追うつもり秋の蝶　節子
三交代勤務深夜の夜食かな
よく揺れる西戸崎線秋の晴

穴涼しウツボの顔の鳥に似て　真理子
防人の島へと続く鰯雲
釜底のおこげむすびし夜食かな

扇風機まわし詰め所の巡査留守　佳与子
南国の花のまろびて残暑かな
階段の際にまで寄せ秋の波

ため池に水位の戻り葛の花　由紀子
蔓あればひいてみる蔓秋山路
買い忘れして引き返す鉦叩

自選句　十九

「平成十九年十月投句」より

秋の野は小さき花の多かりき　聖子
水澄みて泳ぐ魚の影確か
常暗き部屋尚暗く秋深し

大空に突然鷹の渡りかな　節子
まず一羽現れてたちまち鷹柱
佳与子さん新居九階秋の空

浅黄斑いると手まねき藤袴　真理子
秋祭り合図の花火火の粉飛ぶ
啄木鳥に気付きてよりの山静か

遅れくる一羽の鷹の渡りかな　佳与子
一人降り九人乗り込む月の船
公害の街とは昔秋晴れて

鷹渡る雲間より現る七八羽　由紀子
皿倉嶺より流れ来る水の秋
国分けし川や数珠玉両岸に

感謝して歳九十にごり酒　光子
月縁をよぎる鴎も月の海
船窓に秋の日さして壱岐航路

「平成十九年十一月投句」より

タクシーを待つ力士ゐし冬の街　節子
刈りてなほ奥にはだかる刈蓮
中洲へも行ける川風冬ぬくし

児の草履足にあまりて七五三　真理子
落葉掃く箒ぼこりや博多古図
スクリューに巻きつく沼の破れ蓮

鯉の餌を鴨にもやりて小六月　佳与子
粋筋へ渡る橋とや実むらさき
蓮根掘るエアーホースを伸ばしつつ

辻井戸の厚き石蓋花八手　由紀子
煤けたる常夜灯ある冬の川
枯れ蓮の実の落ちて浮く濠端を

こもごもの思ひの中に時雨かな　光子
父の手のまだやわらかく冬構
名残惜しとて折り紙の雪うさぎ

帰り咲く躑躅も普賢岳に今　聖子
御薬師の縁日に売る毛糸帽
時雨るれば傘は深紅にあらまほし

【青春】

原作　サムエル・ウルマン　　宇野収、作山宗久訳　　三笠書房

青春とは人生のある期間ではなく心の持ち方をいう。
バラの面差し、くれないの唇、しなやかな手足ではなく、たくましい意志、ゆたかな想像力、もえる情熱をさす。
青春とは人生の深い泉の清新さをいう。
青春とは臆病さを退ける勇気、やすきにつく気持ち振り捨てる冒険心を意味する。
ときには、二十歳の青年よりも六十歳の人に青春がある。
年を重ねただけで人は老いない。理想を失うときはじめて老いる。
歳月は皮膚にしわを増すが、熱情を失えば心はしぼむ。
苦悩、恐怖、失望により気力は地にはい精神は芥（あくた）になる。
六十歳であろうと十六歳であろうと人の胸には驚異にひかれる心、おさな児のような未知への探求心、人生への興味の歓喜がある。
君にも我にも見えざる駅逓（えきてい【※1】）が心にある。　【※1「局」の意、「無線局」と訳している訳者もいる】
人から神から美、希望、よろこび、勇気、力の霊感を受ける限り君は若い。
霊感が絶え、精神が皮肉の雪におおわれ悲嘆の氷にとざされるとき、二十歳だろうと人は老いる。
頭を高く上げ希望の波をとらえるかぎり八十歳であろうと人は青春の中にいる。

あとがき

『響風』も第三号の発行となり、編集にあたっては「あしや句会」の吟行記録及び足跡をできる限り正確に残すよう努めています。
今回は、編集後記に変え、前頁に「サムエル・ウルマン」の「青春」の詩を紹介致します。
「青春」の詩の日本語訳は、岡田義夫氏、作山宗久氏、松永安左衛門氏等数多くの方に訳されていますが、編集担当の好みで作山宗久氏訳を掲載させて頂きました。
「あしや句会」の皆様のいつまでも変わることのない青春の志・みずみずしい感性が、句作により活かされる事を期待するとともに、編集担当自身も「青春」の詩のような気概・情熱を忘れることなく自己の人生観として大事にしてゆきたいと考えています。

※【詩人「サムエル・ウルマン」について】

幻の詩人とも言われている「サムエル・ウルマン」は、一八四〇年四月十三日、ドイツのヘヒンゲンでユダヤ人両親の長男として誕生。この「青春」の詩は、ウルマンが七十代で書いたもので、一九二二年に家族が発行した詩集「八十年の歳月の頂から」の巻頭の詩です。この詩は「リーダーズダイジェスト」が一九四五年に「**HOW TO STAY YOUNG**」のタイトルで掲載し、その後、一九八二年、宇野収氏が日経新聞に「青春」の一部を紹介、大きな反響を呼びました。

ホームページ・編集担当

響　風－Hibiki　Winds－

あしや句会　第３号

平成 20 年 2 月発行

発行人：江本　由紀子